

明治期工手学校卒業生の海外活動

——台湾を中心として（一八九五～一九〇五）

蔡 龍 保

一、はじめに

近年来、日本統治期の台湾史研究は、日々進化している。このような状況の中で、新しい課題や新しい視角からの研究も進められ、植民地官僚に関する研究も日増しに重視されるようになっていく。植民地官僚に関する研究は、呉文星氏が一九九七年に発表した「東京帝國大學與臺灣「學術探檢」之展開」がはじまりである。呉氏は、東京帝國大学の教員と生徒が、学会、日本中央（日本政府）や台湾当局（台湾総督府）の要求に従い台湾で學術調査を展開し、この成果が教育や學術、そして、植民地統治に影響を与えた点を指摘した。^①その後、呉氏の研究は、札幌農学校や、京都帝國大学など他の重要学校へとその研究の幅を広げている。^②

このほかに、日本の学者である岡本真希子氏が『植民地官僚の政

治史―朝鮮・台湾総督府と帝国日本』の一書を発表し、植民地官僚関連の各制度、上級官僚の人材とその移動、ならびに、民族問題と植民地官僚制度の複雑な関係について明らかにした。^③また、松田利彦編の『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』は、植民地官僚の出身と系譜、植民地官僚と政策の形成、植民地官僚の精神と政策思想、植民地官庁の人事任用、移動などの課題について、多くの学者が共同で研究を進めた成果といえる。^④

このような実証的研究の出現により、植民地官僚を中心とした研究は、日本統治期の台湾史研究の重要な観点となっている。筆者は長年日本統治時期の台湾における交通史、土木史等のインフラ（infrastructure）と「近代化」の研究に従事しており、そのなかで、台湾総督府が後藤新平の民政長官就任後、長谷川謹介と長尾半平を招聘し、鉄道と土木部門の技術集団を整理した事に気付いた。長谷

川謹介の総督府鉄道部技師長、鉄道部長就任期間（一八九九～一九〇八）の鉄道技師等についていえば、東京帝大出身者が六〇%を占め、京都帝大出身者は二〇%、その他学校の出身者は二〇%を占めていた。⁽⁵⁾長尾半平が総督府土木部長に就任し、人事刷新を行った後（一八九八～一九二四）は、東京帝大出身者が五六%を占め、京都帝大出身者は二二%、九州帝大出身者は二%を占めていた。⁽⁶⁾東京帝大、京都帝大等の一流大学出身の技師が、鉄道部、土木部共に、八割近くを占めており、即ち上層テクノクラートの多くが東京帝国大学、京都帝国大学出身のエリート技術者であった。

しかし、帝国大卒業生以外に、別に土木技術関係の人材が専門学校または工業学校の卒業生から輩出されていた。日本は明治維新後、大量の土木技術の人材を必要とし、相次いで民間の技術者養成学校が設立され、必要な人材が育成された。例えば、工手学校、攻玉社工学校、関西工学校、商工学校、中央工学校等は、鉄道、土木、工業の中級技術者育成に貢献した。この他に、専門的に鉄道の人材を育成する学校もあり、例えば岩倉鉄道学校、東亜鉄道学校、遅れて東京鉄道中学校等が設立された。⁽⁷⁾これらの学校の卒業生は、卒業後植民地である台湾に赴き、多くが才能を発揮した。本研究は、工手学校を例として、工手学校成立の背景とその特色、日本統治初期における卒業生の内地から台湾への移動、及び卒業生の在台就職状況を分析し、これら学校の植民統治との関係を考察し、これ

まで帝国大学に留まっていた官学関係の研究を更に掘り下げるものである。

二、工手学校の設立とその特色

（一）工手学校の設立

1. 技術立国、工業立国

日本は戊辰戦争（一八六八～一八六九）後、幕府体制から、近代天皇制の国家へと転換したが、負けた旧幕臣たちは徳川幕府同様、時代の舞台から消える事はなく、反対に近代日本のなかで重要な役割を担う事になる。日本政府は、西洋の近代化を学ぼうとし、多くを西洋技術者に頼り、御雇外国人の数は、工部省の設置から廃止まで、五八〇人にのぼった。旧幕臣たちは「技術教育立国」の理念を抱き、自国の人材を育成する為、相次いで沼津兵学校、商法講習所、明治女学校、独逸学協会学校、同人社、慶應義塾、攻玉社等を創立した。工手学校は渡邊洪基が中心となり、榎本武揚、大島圭介、渋沢栄一、田口卯吉等の支持を受け設立した、中堅技術者の教育機関であった。⁽⁸⁾

渡邊洪基は開明的な福井藩の出身で、岩倉使節団の一員でもあり、自然と非凡な視野を身につけていった。工手学校は「旧幕臣の教育ネットワーク」の産物であり、旧幕臣たちの「技術教育立国」という志しを体現したものであった。石橋純彦、井口在屋、巖谷立

太郎、辰野金吾、中村貞吉、中野初子、古市公威、三好晋六郎、大井才太郎、栗本廉、山口準之助、藤本寿吉、杉村次郎、水上彦太郎等一四名の創立委員は、一人一人が当時の先進的で、優秀かつ氣勢が高い工学士であり、程なく日本工業教育会の中心人物となる者ばかりであった。¹⁰⁾

所謂「工手」というのは、高等技術者と職工、工夫、鉦夫の間にたち、工業発展を促進し、専門的学術性を習得した中等技術（技手、職工長）の能力と資格を有した者をさす。¹¹⁾この中等技術者——「工手」は鉄道、電気、建築、機械、等の事業、すなわち日本近代殖産興業の過程において重要な役割を果たした。工手学校の設立は時代要求に応じたもので、民間企業側からも大いに歓迎された。当時民間産業は多くの技術者を必要としており、多くの賛同者が精神面、経済面において、次々と工手学校を支援した。例えば、三菱財閥の岩崎彌之助と岩崎久彌、大倉財閥の大倉喜八郎、三井物産の三井武之助、実業界において指導的役割を担っていた洪沢栄一等、彼らは皆、この私立工手学校に関心を示し、経済的援助を行っていた。

旧幕臣たちが「技術立国」の考えを持っていたのに対し、これら民間の企業家は「工業立国」という理念を抱いていた。洪沢栄一は、「教育界は形而上の学を崇拜し、実業界は学芸を度外に置き、両者の間風馬牛も及ばずして調和を為すに道なき」と、商工業に対

する理解のなさを嘆いていた。このような背景の下、日本の工商業が自主独立的に発展する為には、実業教育を重視する必要があった。このような信念を持った洪沢栄一は、渡邊洪基同様学校の創立に力をいれ、商法講習所、大倉商業学校、岩倉鉄道学校等と、相次いで実業学校の創設に参画した。洪沢の経歴は「商」に偏っていたが、「工」にも十分関心を示し、工業教育の役割を果たした工手学校にも大いに賛同し、同校の顧問に就任している。¹²⁾

2. 工手学校の誕生

当時官立の技術者養成機関はあったものの、建設現場の専門的技術者を補佐する人材がとても不足していた。工部省直轄の工部大学校（前身は工学寮、工学校）は、一八七三年四月から九月までに第一期生の募集を終え、一八七九年土木工学科卒業生二名を出し、一八八六年三月工芸学部と合併するまでに出した卒業生は僅か四五名であった。¹³⁾このような状況は、まさに工手学校設立の中心人物渡邊洪基が、「工手学校設立趣意書」の中で語った通りであった。

……今我国の有様にては、技術者養成の学塾甚だ尠く、一二官立学校に於いては、高尚なる技師を養成するに充分なるも、各専門技師の補助たるべき工手を養成する学校に至りては、亦一校の設置あるなし。故に工業家に於ては、補助工手の供給なき

に苦しみ、勢ひ學術応用の思想に乏しき者を以て、彼の高尚なる技師の補助と為さざる得ず。為に技師は使役に不便を感じるのみならず、結局、工業化の不利益を來たすものにて、即ち我国工業進歩の一大障礙を与ふるものと云ふべし。是れ余輩の最も遺憾とする所なり。因て茲に一の工業学校を設立し、学科を土木、機械、電工、造家、造船、採鉱、冶金、製造密の八学科を分ち、世間有志の子弟又は昼間各工場に使雇せらるる工手、職工等に就学を許し、授業方法は専ら速成を旨とし、所謂補助工手を養成し、以て我国工業の隆盛を企図す……⁽¹⁴⁾

渡邊の学校創立の構想は、帝国大学工科大学建築学科教授の辰野金吾と相談した後、一八八七年一〇月一〇日に開催された工学会で提案され、満場一致の賛成を得た。ところが渡邊が文部省の意向を伺ったところ、「このような人材を育成する経費はない」ということで拒絶された。一八八〇年の「工場私下概則」の制定に象徴されるように、官から民への工業化政策の転換が始まり、一八八五年に工部省が廃止され、工部大学校は文部省に移管されることになる⁽¹⁵⁾。文部省が、技師層の技術者を養成する一方で、渡邊は「技術立国」、「工業立国」の考えと使命感を抱き、「政府がやらないのなら、民間でやればいい」ということで、一八八七年一〇月三十一日に工手学校を創立した⁽¹⁶⁾。

工手学校は夜間学校として、「仕事をしながら、学習する形式」で、実業教育を推進し、土木、機械、電工、造家（建築）、造船、冶金、密製造（応用科学）等八個の学科を設置し、中級技術者を育成した（表1参照）。工手学校の人事配置を見てみると、学校の管理経営面は、旧幕府の洋学教育機関であった「大学南校」出身の人材を多く採用し、教授面では、「工部大学校」出身の人材を多く採用しており、多くが東京帝大工学部の教授であった。「東大系」の教師を採用する事は、同校の伝統となり、当時「豪華な教授陣」とまで言われ、工手学校が社会の信頼を獲得し、学生を魅了し、入学志望する重要な理由の一つであった。一八九〇年入学の小坂梅吉が「築地工手学校で授業を受ければ、直接東京帝大の教授たちの教えを受けることが出来る。当時本校の学生にとって、これは大きな希望であり、また大きな誇りであった⁽¹⁷⁾。」と述べているが、強力な教授陣を揃える事が出来たのは、渡邊洪基の人望と古市公威が人材集めに奔走した努力の結果である⁽¹⁸⁾。

一八八七年創設当時、学科は予科と本科に分かれており、就業年数は予科が半年間、本科が一年間であった。時局の発展と要求に応じて、学科と就業年数は徐々に深化していった。一八九二年予科の就業年数を一年に延長し、本科と合わせて、就業年数を合計二年間、四学期、毎学期は五ヶ月間とした。予科は尋常小学校卒業者を入学対象として、一、二学期は予科科目のみの履修、三、四学期は

表1 工手学科8学科の必須履修科目一覧

履修科目 学科別	履修科目
土木学科	数学、河海工、道路、隧道、鉄道、施行法、橋樑、測量法、製図
機械学科	数学、力学、地形構造及煉瓦職、蒸気機関及蒸氣缶、水力学水力機、工場器具、材料弱強論、機械運動学、製図
電工学科	電気及磁気、数学、電気実験、電信及電話、電力及電灯、製図
造家学科	家屋構造法、建築材料、測量法、和式建築法、材料強弱論、仕様設計法、製図
造船学科	木船、鉄船、計算、数学、力学、製図
採鉱学科	鉱物学、地質学、採鉱学、測量法、機械運動学、製図
冶金学科	鉱物学、地質学、舎密学、冶金学、試金術、機械運動学、製図
製造舎密学科	舎密学、舎密手工、分析舎密、製造舎密、機械運動学、製図

出典：工手学校『工手学校一覧』東京：工手学校、明治28年、8頁

本科科目を履修した⁽²¹⁾。予科の二学期からの入学を希望するに、入学試験を通過した者以外に、中学校の第三学年を修了した者も入学申請を行う事が出来た。本科の一期からの入学を希望するには、入学試験を通過した者以外に、中学校、師範学校及びその他同等程度の学校を卒業した者も、入学申請を行う事が出来た。⁽²²⁾そ

の後、時代と時局の変化に従い、学則、学制、学科全てにおいて変更された。例えば、一九一三年九月に高等科を設置し、学生数を増やし、一九二八年には工学院と改名すると同時に、本科と予科の就業年数をそれぞれ二年間に延長し、⁽²³⁾ますます専門的学問の教授体制を發展させ、優秀な卒業生を育成していった。日本の学生以外にも、僅かながら清国中央政府が派遣した学生や、韓国留学生、台湾留学生も在学していた。⁽²⁴⁾

第一期卒業生は一二一名で、土木学科二九名、機械学科一四名、電工学科一二名、造家学科一九名、造船学科一名、採鉱冶金両学科の兼修者が一九名、採鉱学科四名、冶金学科四名、製造舎密学科九名であった。⁽²⁵⁾第一期生から第五期生までの学科別を見てみると、土木学科が一三六名で最多、続いて採鉱冶金両学科の兼修者が一二四名であった。土木学科の卒業生が最も多いのは、明治初期、日本国内において、積極的に都市整備、鉄道敷設、通信網の拡充、港湾整備を進めており、土木工学が突出して重要であった事を示している。採鉱冶金学科の兼修者も、土木に続いて多いことは、明治初期、日本国内において鉱業が大いに発展し、工手学校の賛助者が住友、古河の銅山、そして三井、三菱といった炭鉱業が中心であったことを反映している。⁽²⁶⁾初期における、卒業生の日本国内での活躍は、日本が明治維新後、「近代化」に邁進する過程において、同校が余ることなく「技術立国」、「工業立国」の役割と機能を發揮したこと

を示している。

当時、東京帝大が育成した上級技術者は非常に少なく、土木学科を例にすると、一八七九年から一八八八年の一〇年間で、僅か六四名であり、工手学校一年(二期)、ひいては一期の土木学科卒業生の数より少なかったのである。工手学校は一八八九年から一九〇五年までの一七年間で、合計三二期、四三六九名の卒業生を輩出し、卒業生は平均一年間で二五七人にも達しており、各中央、地方官庁や民間業界において、その能力を発揮していった。

(二) 卒業生の活動

日本資本主義確立の過程は、同時に帝国主義に邁進する過程でもあり、日本帝国は相次いで、日清戦争、日露戦争を引き起こし、台湾、朝鮮、満州、南樺太等を占領した。日本帝国の対外的拡大がもたらした新局面は、工手学校内部の発展と卒業生の活躍に深い影響があり、日清戦争ですでにその端緒が見られるが、日露戦争ではその影響は更に大きなものであった。

1. 日清戦争と工手学校卒業生の進路

日清戦争後、日本は清国より二億三千万両(三億六五〇〇万円)という、日本の一八九五年における国家財政歳入の四倍以上の戦争賠償金を獲得した⁽²⁹⁾。日本は清国の賠償金を基に、軍備拡張を軸とし

た「戦後経営」を推進した⁽³⁰⁾。日本国内の産業規模が急速に拡大し、大型工場が相次いで建設され、製糸業と紡績業等軽工業のほか、造船、製鉄、建設業等重工業も発展した。一八八七年日本全国の工場数は八八〇ヶ所余り、工員数は六万三千人のみであったが、一八九七年になると、工場数は七二八七ヶ所、工員数は四三万人となり、その増加速度には驚くべきものがある。

景気の上昇を背景として、産業界もそれにつられて発展を遂げた結果、現場の第一線で活躍する工手の需要が大幅に増加し、工手学校に入学する人数は激増した。創立時には二二八名のみであったのが、一八九八年になると一三五一名まで増加した⁽³¹⁾。当時、工手、技手レベルの技術者を養成する学校は非常に少なく、工手学校の他には、私立の攻玉社、商工徒弟講習所、官立の電信修技学校のみで、また性質も異なっていた為、工手学校の卒業生は非常に歓迎され、官庁や民間企業は、学生が卒業する前に、事前採用を行う程であった。

日清戦争後、日本は初めての植民地―台湾を獲得した。植民地経営の成果は、日本が文明的な先進国である事を証明出来るか否かに関わってくる為、積極的に植民地の各種計画と建設を打ちたてていった。台湾の各種近代的事業を推進する為には、当然各部門の人材を投入する必要がでてくる。工手学校卒業生は初期において、国内の人材需要が多く、就職が容易であった為、国内、特に東京に集

中して就職する傾向が多かった。それでも、毎年少なからず卒業生が渡台しており、植民地台湾が卒業生の活躍の場の一つとなった事は、日本の植民地経営において、一定の影響力と重要性があった（詳細は「三、卒業生の在台活動」参照）。

朝鮮に関しては、日本は日清戦争後、金弘集等開化派政権を通して、朝鮮の植民地化を推し進めていたが、一八九五年一〇月、日本公使三浦梧棲を中心として引き起こされた「閔妃虐殺事件」により、政治面では一旦朝鮮から撤退し、その隙にロシアが政治上で優位な立場にたった。しかし朝鮮の輸出の八、九割、輸入の六、七割を日本が占めており、日本は双方の貿易関係を深める事により、朝鮮からの全面撤退を免れた。⁽³³⁾

当時の日朝貿易は、日本が朝鮮の領事裁判権、関税自主権を剥奪し、居留地を設置する等、不平等条件の下で行われていた。不完全な貨幣制度と交通機関により、日本商品の流入が一部阻害されていた為、日本は積極的に第一銀行券の発行、京仁、京釜鉄道の敷設を推進した。日清戦争後から、日露戦争勃発直前まで、朝鮮における日本の政治、経済利権は如実に増大し、居留地の日本人数は一八九五年の一万八千人後から一九〇三年の三万人近くまで増加した。⁽³⁴⁾ 工手学校の卒業生もまた、公的部門や民間企業に従い、朝鮮に渡り活躍した。一九〇二年版の『工手学校同窓会名簿』によると、卒業生が韓国京城駐劄兵舎新築工場、釜山港志岐組、釜山港京釜鉄道建設事

務所に就職しているが、彼らが大量に朝鮮に渡るのは、日露戦争後のことである。⁽³⁵⁾

一九〇五年七月、工手学校管理長の古市公威工学博士が、第三期卒業式において、次のように語っている。

……昨今は帝国大学を始として各種の専門学校から続々卒業生が出ますが、直ちに相当の位置を得ると云ふことは余程むづかしいやうに見える、諸君の中でも既に電気工学の如き、採用の申込があつて直ちに職務に従事することの出来る人もあらうが、まだ多数は是から口を求めねばならぬ、是は一面甚だ嘆かしいやうに見える、是を二十七八年戦役後の一時工業勃興した時代に比べて考へると、其の当時は工手学校の卒業生も所謂羽が生べて飛ぶやうな勢を以て他に採用されたのである、其の時に比べると今日は霄壤も畜ならざる相違あるやうに見える。⁽³⁶⁾

即ち、初期の卒業生は、日本産業の急速な発展を背景として、業界の第一線で活躍する人材、もしくは官庁の中級技術者となり、工手学校創立の目標を達成していったのである。日露戦争前後になると、日本内地に技術者養成学校が續々設立され、工手学校卒業生の就職も厳しくなった。これは沢山の卒業生が満、韓へ進出する原因のひとつと思われる。

2. 日露戦争と工手学校の発展

一九〇四年二月に勃発した日露戦争は、日、ロ両国が満州、韓国への侵略競争を繰り広げ、衝突した事が発端であった。日本は「滿韓交換論」を基礎とした提案を行っていたが、ロシアと妥結する事は出来ず、武力に訴える事となった。日本は幸運にも戦勝をおさめ、一九〇五年九月五日にロシアとポーツマス条約を締結し、ロシアは朝鮮における日本の優位的権利を認め、旅順、大連の租借権及び長春以南の鉄道（南満州鉄道）等の権利を引き渡し、樺太南半分側を割譲し、日本海、オホーツク海、ベーリング海の漁業権を譲渡した。即ち日露戦争後、日本は韓国への支配権を確立し、南満州での権益を独占したのであった。⁽²⁷⁾

日本産業史の観点からみると、日露戦争後の日本産業界は明らかに画期的な発展へと向かっていた。樺太南部、関東州租借権、南満州鉄道経営権、北洋漁業権の獲得は、日本国内産業に強烈な刺激と発展をもたらした。世界屈指の撫順炭坑の採掘、南満州鉄道による市場の拡大、それに加えて樺太の漁業、林業は、日本産業の対海外拡大の契機となった。これらを背景として、当時の工手学校経営陣は、「滿韓経営」がもたらす前途に大きく期待を寄せ、帝国を支援する事として、絶えず学生を激励していた。一九〇四年二月の工手学校第三〇期卒業式で、海軍中将で、男爵でもある有地品之允も、次の通り語っている。「……本校卒業ノ諸子亦其所執ノ業務は各々

異ルベシト雖モ、実務実行ヲ以て帝国ノ富強ニ賛スル所アルハ、余カ年来ノ希望ト其軌ヲ一ニス。今ヤ此盛会ニ列スルヲ榮トシ、諸子ト共ニ帝国ノ將來ヲ開拓スルノ任務頗ル大ナルヲ感シ……」⁽²⁸⁾

日清戦争後、一八九七―一八九八年、一九〇〇―一九〇一年に二度経済危機が発生し、織紗業から紡績業、炭鉱業、鉄道業の中小資本へと拡大し、製糸業もまた世界恐慌の影響を受け、恐慌状態に陥った。これら各種工業が不振に陥っているのに対し、工手学校経営陣は、学校の発展と卒業生の進路を、日本の清国と韓国への拡張に期待した。一九〇四年二月工手学校の第三〇期卒業式で、同校管理委員の辰野金吾工學博士は、次のように語っている。

……今日ハ不幸ニシテ日露問題ガ大イニ切迫シテ來タ為ニ諸工業ハ奮ハナイ甚タ不振ノ有様デアルカラ今卒業サレタ諸君ハ右カラ左直チニ位置ヲ得ルコトハ困難デアルト思フ卒業生諸君ニ對シ特ニ御氣ノ毒ニ感ズルノデアル併シ將來ハ如何ト云ウ拙者ハ大イニ有望ト思フ有望ト確信スルノデアル、將來内地ノ工業ハ勿論外国即チ清韓兩國ニ於テノ工業ハ大イニ發達スル時期ガ來ルト確信シテ居ル、サスレバ今日ノ卒業生諸君ハ勿論今後卒業スル所ノ諸君ニ對シ、又既ニ卒業セシ諸君ヲモ共ニ歡迎サルル時期ガ來ルコト遠カラザルベシト信シテ居ル、現ニ京釜鐵道ノ如キハ非常ナ全速力ヲ以テ工事ヲ進メツツアリテ本年中ニハ

是非共之ヲ成功セシムルト云ウ有様デアル、又京釜鉄道ノミナ
ラズ將來ハ京義鉄道モ必ズ出來ルデアラウト思フ種々ノ點ヨリ
之ヲ熱望スルノデアル一步進ンデハ義州ヨリ營口ニ或ハ滿州ニ
之ヲ延張スルコトヲ望ム彼北清地方ノ如キハ或ハ自カラ勞セズ
シテ他国デ敷設シタモノヲ利用スル場合モアルト思フ、此鉄道
事業ニ關聯シテ自然鉱業ナリ機械製造ナリ其他ノ工業ガ清韓ノ
野ニ續々勃興スル時ガ近キ將來ニアルト信ズ果シテ清韓ノ野ニ
工業ガ勃興スルトセバ自然技師技手ノ必要ヲ感スズハ明白デア
ル……⁽³⁹⁾

ここから、辰野金吾の、同校卒業生が海外において活躍する事への期待は、日本帝国の対外的拡張に関する青写真に応じたものであった事が分かる。一九〇三年末、天皇は勅令を下し、京釜鉄道の早期完成を命じ、政府主導の下、強制的に朝鮮人を徴用し、工期を早めようとした。京義本支線及び馬山線は軍用線としての性質を持つており、軍事費より建設され、一九〇五年に開通された。京釜鉄道は一九〇三年に京仁鉄道を合併し、一九〇六年に国有化となり、満鉄同様、日本の軍事上、経済上において、朝鮮、中国へと侵入する大動脈となったのである。

一九〇三年二月二八日、工手学校管理長の古市公威が鉄道作業局長から京釜鉄道総裁へと転任した。一九〇六年七月、京釜鉄道は

韓国統監府鉄道管理局へと体制変更となり、古市公威も京釜鉄道総裁から韓国統監府鉄道管理局長へと転任し、一九〇七年六月一七日までの約三年半の期間、京城、釜山間の鉄道建設と運営の計画を策定した。⁽⁴⁰⁾時局の変化が海外発展の機会を創造し、さらにこのような人脈関係もあり、一九〇四年から朝鮮、清国に渡る工手学校卒業生が顕著に増加し、かつ多くが古市公威が主導する鉄道事業に参画していた。

一九〇三年から一九〇五年の間の『同窓会名簿』から、韓国、清国へ渡った人数の変化を観察すると、その一端を窺い知ることが出来る。一九〇三年に韓国に渡った卒業生は九名、清国へは五名であった。⁽⁴¹⁾一九〇四年には、韓国に渡った卒業生は二一人に増加し、清国へも九人に増加し、注目したいのは、さらに日露戦争に兵士として出兵、もしくは戦地出張をした者が、三四名いたことである。⁽⁴²⁾一九〇五年には韓国に渡った卒業生は三一名までに増加し、清国へも二〇名まで増加し、出兵者あるいは戦地出張者は八二名となった。⁽⁴³⁾これから、日本帝国の拡張にしたがい、益々多くの工手学校卒業生が、韓国、清国において活躍し、同時に国策を支える役割を担っていたことが分かる。

工業国日本の基礎は、原料、機械、設備、技術であったが、根本的なのは、矢張りこれら基礎を扱う技術者であった。戦争時期には、これら技術者の需要は一時減少する傾向がみられるが、一度戦

争が終結すると、需要量の急速な増加がみられ、工手学校に対する業界の期待が、ここからも見てとれる。学生数は、一八八八年創立当時の二八八名から、翌年は六〇〇名に増加し、一九〇四年の日露戦争時期は約一三〇〇名で、戦後は更に増え続け、一九〇七年になると二二〇〇名まで増加した。⁽⁴⁾ 工手学校は時勢の要求に応じる為、一九〇四年一二月に学制を改正し、学生の定員を二五〇〇名とした。一九一三年九月には再度改定を行い、夜間部二五〇〇名、昼間部一〇〇〇名、総計三五〇〇名とした。⁽⁵⁾ これら学生数は、日本業界、日本帝国の対外的拡張、植民地経営等事業における技術者需要に対する工手学校の対応を示している。即ち、当時工手学校の発展は、日本帝国の国内外政策と密接な関係にあり、帝国の拡張に従い、工手学校も対応、支援を行ったのであった。

一九〇五年七月、当時京釜鉄道総裁であった工手学校管理長古市公威が、第三期卒業式上で、満韓経営が「日本の天職」である事を忘れずに、と学生を激励し、同校卒業生の満蒙で活躍する事を強調したことは、工手学校が国家の対外的発展に呼応するという、重要な役割を如実に示している。

……それから人は口を開けば満韓経営と言ふ、此の方面にも確に仕事があるに相違ない、此の学校で専門として教授する所の事業は何があるかと云ふと満韓には殆んど何みの無いと云つて

宜い、少々見るべきものは皆な皆な外国人の仕事で、それも電気事業と金鉾ぐらいなものである、まだ満洲には遺利があるやうに聞及んで居ります、満韓の経営は日本の天職と云つて宜い、天職でなくつても天職にしてやつけ付けなければならぬ、それで本校の専門とする各種の事業は満韓地方に於ては先づ總て創設すると云つて宜いくらいものであります……⁽⁶⁾

三、工手学校卒業生の在台活動

前節の論考から、工手学校設立後、養成された卒業生は先ず日本国内において「技術立国」、「工業立国」の使命を果たし、その後日本帝国の対外的拡張に従い、更に海外において活躍した事が分かった。日清戦争と日露戦争はそれぞれ、同校卒業生が台湾と満韓において活躍出来る機会を提供し、極めて顕著に、官学の協力関係を表していた。日清戦争後、台湾は日本の第一の植民地となり、日露戦争までは同校卒業生が最も希望する海外活動地点となった。日露戦争後は多くの卒業生が朝鮮、満洲に渡り、植民地経営に参画し、官学の協力関係は、更に次の段階へと発展していく。本節は日本の台湾領有後から、日露戦争終結まで（一八九五―一九〇五）、日本が清国満洲、韓国に新局面を切り開く前までの、工手学校卒業生の、台湾における活動状況を考察する。

(二) 卒業生の第五志望——台湾

日本統治時代の初期、一部分の工手学校卒業生は、台湾が僻地であり、気候風土も悪かった為、左程台湾に来る事を望んでいなかった⁽⁴⁷⁾。しかし台湾にいる先輩の経験⁽⁴⁸⁾を聞き、教授達からも激励を受け、台湾は卒業生が就職場所を選ぶ重要な選択肢となった。辰野金吾は一九〇一年の第二期卒業式で、次のように学生を激励した。

……拙者が従來の經濟に依ると卒業生諸子は其の隨身せんとする技師若くは就職せむとする所の工場を選択せずして土地の遠近とか都鄙とか兎角地利のみを選択する嫌が有る、例を擧げて言ふと台湾に大層好い口が有るから行くが宜しいと言へば台湾は土地が悪くていけませぬから先づ御斷りしませうとか家の都合があつて遠方には行けませぬから御斷りをしやうと云ふことを聞いたことが再三である、それは大に諸子の為に取りたくない真に遺憾とする所である、今後好機會に遭ふた時は土地の遠近など云ふことは問はず選擇する所に我隨身せむとする所の技師の如何及就職せんとする工場の信用如何に依て諸子が進退を決せられんことを望むのである、言葉を換へて言ふと拙者は技師技手の海外輸出を望むのである大に是を奨励するのである殊に此東洋地方に出稼ぎすることを非常に奨励するのである……。

一九〇二年の『工手学校同窓会會員名簿』によれば、当時工手学校同窓会の會員は、名誉會員が五〇名、正會員が一五一七名、准會員が一二名、総計一五七九名であつた。名誉會員とは、工手学校の卒業生及び工学上の有識者で、名望が高い人物が推薦されてなるもので、初期は全て工学界の名望ある人物であり、工手学校出身者はいなかった。正會員は工手学校出身者、准會員は工手学校の在學生であつた⁽⁴⁹⁾。従つて、卒業生の活動状況を觀察するのであれば、正會員を分析の対象とする必要がある。しかし實際は、一九〇二年まで工手学校は二七期の卒業生を輩出し、合計人数は三四七〇名であるにも拘わらず、『工手学校同窓会會員名簿』では、一五一七名、實際の卒業生の四四%のみしか把握していない。

工手学校同窓会の設置と、『工手学校同窓会誌』の創刊は一八九九年の爲、日本側の『工手学校同窓会誌』と『工手学校同窓会會員名簿』からでは、日本統治時期最初の何年かに、台湾に渡つた工手学校卒業生の動態を窺い知することは難しく、また卒業生の多くが入会していない為、同窓会も初期の卒業生の動態を正確に把握しておらず、台湾方面の官庁、業界の人事資料と細かく照らし合わせて、『同窓会會員名簿』の不足を補う必要がある。

一九〇二年の『同窓会會員名簿』では、卒業生の地域別就職場所⁽⁵⁰⁾は東京府四八五名、福岡県六九名、北海道六四名、大阪府六〇名、台湾五二名、神奈川県四八名、静岡県四二名、長崎県四一名、広島

県三九名、栃木県三七名、兵庫県三二名、愛知県三一一名、新潟県二九名、長野県二八名、鹿児島県二八名、愛媛県二七名、京都府二四名、秋田県二三名、岩手県二一名、山口県二〇名、岡山県一九名、宮城県一七名、福島県一四名、岐阜県一四名、熊本県一四名、群馬県一三名、千葉県一一名、三重県一〇名、山梨県一〇名、山形県一〇名、福井県九名、埼玉県九名、茨城県八名、青森県八名、滋賀県七名、島根県七名、大分県七名、佐賀県六名、韓国六名、富山県五名、宮崎県五名、アメリカ五名、鳥取県四名、高知県三名、和歌山県三名、香川県二名、徳島県二名、沖縄県二名、奈良県二名、清国二名、対島一名、小笠原島一名であった。多くの卒業生のなかで、台湾に渡って職を得ようとする者は少なくなく、東京府、福岡県、北海道、大阪府等に続く程度であった。^①

(二) 卒業生の台湾における就職と移動

一八九九年から一九〇五年の間の『工手学校同窓会誌』と一九〇二年から一九〇五年の『工手学校同窓会員名簿』、および、戦前に台湾で出版された『人事録』、『人名録』、『台湾総督府公文類纂』の進退文書を整理すると、一八九五年から一九〇五年の間に少なくとも一八名の卒業生が来台していることを把握することができる。以下、出身、台湾における職業と移動状況の分析を進めることで、その時代的特色および意義を明らかにしたい。

1. 来台前の経歴

履歴資料中の来台前の経歴を見ると、工手学校は、学生に働きながら勉強させる夜間学校であり、学生は在学期間に実務実習を経験し、また卒業後に実習した会社へ従業員として戻る仕組みが取られていたことがわかる。それゆえ、たとえ卒業後すぐに来台した卒業生であっても、多くは一定の実務経験を有していた。卒業生の来台以前の経歴は、主として以下のように分類することができる。

(一) 中央あるいは地方官庁における業務…鉄道省、逓信省、内務省、農商務省等の中央官庁、あるいは、地方県庁内務部、鉄道部、郵便電信局、電話交換局などの土木、営繕、交通関連部署において、傭、雇、工手、技手を担当し、鉄道、電報、電信、水道、治水、鉱山などの業務に従事している。

(二) 民間業界における業務…主要なものは、鉄道、建設、土木請負、鉱山、電力などの関連会社である。たとえば、筑豊工業鉄道会社、日本鉄道株式会社、武相中法鉄道株式会社、函樽鉄道株式会社、岩越鉄道株式会社、本間鉄道工業事務所、紡績会社の建築部門、日本銀行建築所、陸中釜石鉱山田中製鉄所、三菱合資会社吉岡鉱山、鯉田炭坑、藤田組鹿用郡平坂鉱山、高工秋炭鉱株式会社、土木請負業の橋本組、河西組、吉田組、大倉土木組、鹿島組、南築土木会社、

久米工業事務所、および、京都電燈株式会社、日光水力電気株式会社などである。

(三) 軍部関係の機関…多くの卒業生は、卒業後軍隊に身を投じ、土木、技術関係の部署で仕事や学習を行った。たとえば、陸軍省近衛経営部工場、陸軍臨時測量部、陸軍省臨時陸軍建築部、陸軍省経理部、陸軍砲兵工学校、陸地測量部、臨時海軍建築部、海軍省経理局等单位で、兵、上尉、図工、技手、技師などを担当した。

即ち、工手学校の卒業生は、卒業後すぐに來台したとしても、日本国内で一定期間の仕事を経て來台している。その多くは、日本の中央官庁や地方官庁の土木、営繕、交通関係の部門、あるいは、民間鉄道、建築、土木請負、鉱山、電力などの関連会社における実務経験であった。このほかに一部の人は、軍隊に身を投じ、技術専門の軍人となった。

2. 学科別分析

出身学科別に見てみると、土木、建築（造家）、採冶、機械、電工などの五つの学科の卒業生が來台している。既に把握している一・二八名の台湾へ来た卒業生の中で、工手学校の卒業生で学科がわからない一一七名を除く、一一七名の学科は、土木学科八三名（七〇・九%）、建築学科二〇名（二七・一%）、採冶学科八名（六・八%）、

機械学科五名（四・三%）、電工学科一名（〇・九%）であった。

土木学科の募集人数が最も多いことから、卒業生の数もまた最も多く、台湾に来て活躍した卒業生も、他の学科よりはるかに多い人数であった。第二〇、二四、二五回の來台した土木学科卒業生は、それぞれ一一七名に達した。この現象は、日本統治初期の台湾総督府が鉄道、港湾、道路、上下水道、河川、埤圳などの各種の土木工事および土地調査などの事業を速やかに推進するために、大量の土木技術の人材を必要としたことを示している。

3. 來台初任機関の分析

來台した卒業生の初任機関を細かく見てみよう。職についた機関がわからない五名を除く、一二三名の所属は中央官庁が一〇六名で、その内訳は、臨時台湾土地調査局六六名、民政局土木課（臨時土木部、土木課、営繕課を含む）一八名、鉄道部八名、郵便電信局（電話交換局含む）二名、基隆築港局一名、陸軍築城部二名、陸軍経理部三名、陸軍建築部一名、陸軍臨時台湾燈標建設部一名、台湾守備混成第二旅団監察部一名、陸軍憲兵隊一名、海軍澎湖島馬公要港部一名、国語学校師範部一名であった。地方官庁の職に就いたものはわずか四名でその内訳は、台北県二名、台中庁一名、宜蘭庁一名であった。民間企業に就職した人は一三名で、その内訳は、藤田組瑞芳鉱山五名、久米工業事務所三名、日本鉄鋼会社（金瓜石鉱山）一

名、汽車製造合資会社台北支店一名、志岐組台南支店一名、台南橋仔頭製糖会社一名、鹿島組台南出張所一名であった。

このように、この時期の卒業生の初任地の多くは、台湾総督府、陸海軍の土木、交通などに関する機関で八六・二%を占めていた。礦業、土木業、建築業、製糖業などの民間企業についた人の割合は、一〇・六%であった。地方官庁が初任地の者は、最も少なく、わずか三・三%である。その専門と職業の観点から見ると、来台した卒業生は、学んだことを実際に役立て、台湾に才能を発揮する場所を探し求めていた。その中で官庁は、初任地として主要な活動場所であり、中央官庁と地方官庁をあわせると占有率は、八九・五%となる。したがって、工手学校は、台湾総督府が募集した中級技術の人材の重要機関の一つであったといふべきである。

4. 台湾総督府の人材庫——土地調査を例に——

日本統治初期、鉄道、道路、港湾、上下水道、河川、埤圳などの工事に必要な技術者のほかに、各種の重要な調査事業もまた日本の専門家、技術者の支援に頼っていた。たとえば、日本統治初期の重大な調査事業の一つである土地調査においては、一気にたくさんの中級技術者が必要であり、臨時台湾土地調査局では、しばしば日本国内に人材を求めにいった。

たとえば、臨時台湾土地調査局測量長で技師の徳見常雄は、かつ

て日本国内の工手学校及び攻玉社工学校に人材養成を委託し、卒業前に予めこれらの学校の学生を任用していた。一例をあげると、一九〇一年六月、学生が学校を卒業する前に月俸一〇円で樋田重治、小柳貞一、千村萬吉、福頼正人、日高仙吉、山田市郎、土岐佐久次、内田和三郎、村松利太郎、湯浅丑松、佐佐木留蔵、鬼武徳次、城信作、中山祐四郎など一四名の工手学校在学中の学生、および、坂牧篤次郎、松永源太郎、阿部百吉、田中修得など四名の攻玉社工学校学生を土地調査局の雇員として任用し、同年八月一日付けで同局の技手として任用する予定とした。

またこのような「委託養成」の方式をとっていたために、初任地が中央官庁の一〇六名の卒業生の内、臨時台湾土地調査局に六六名（六二・三%）が任用された。このことから、台湾総督府がその統治に必要な人材を工手学校に求め、工手学校は、日本統治期台湾総督府の中級土木技術者の重要養成機関の一つであることをうかがい知ることができる。⁽²³⁾

5. 官庁間の移動

(一) 軍の側から台湾総督府官庁への移動した人々

来台した卒業生の長期的経歴を見ると、曾て軍に関係した者は二五名に達し、とりわけ早期に来台した人々である。一八九五年五月、台湾総督府臨時条例によって設立された民政機関は、台北地区のほ

かは皆何かをすることはできなかった。その後、一八九五年八月、台湾総督府条例が布かれ軍政が実施されることとなった。総督府官僚の内、一、二名の者が文官として任用された以外は、みな陸軍省の雇員として大本営から任命された人びとであった。それゆえ当時は、総督府で事務を担当する人材が必要な場合でも、必ず陸軍省において承認を求めが必要があった。急遽、任用が必要な場合には、事務嘱託の名義で任命を行った。七月二三日付け、台湾事務局の決議によると、台湾に派遣された陸軍省の雇員を総督府の雇員に任命し、新規に任用する者には総督府から委任状を与えるとした。九月八日、職員が就職以来満二ヶ月、勤続且つ成績優秀などの者は、嘱託から雇員に改め、俸給も増加した。このような理由もあり、一期多くの技術者たちが軍から台湾総督府へと流入した。八島震の場合を例にあげてみよう。彼は一八九六年二月、陸軍省雇員の身分で台北県の技手を兼任し、同年四月台湾総督府民政局臨時土木部土木課技手に転任した。また、山口茂樹は、一八九七年一〇月、最初に台湾守備混成第二旅団監督部備員として來台し、十一月、台中陸軍経営部に転じ、翌年八月台中県内務部土木課技手に転任した。

(二) 台湾総督府官庁内の移動

台湾総督府および地方官庁には、非常に多くの土木建築関連部門があり、業務計画によって人事異動による相互支援を行っていた。

この他にも台湾総督府は、段階的、臨時的な必要性に応じて組織を作り、それにあわせて職員の新規募集や他の部門から人手を調達し、その任務が完了すると、また大きな移動があった。たとえば、臨時台湾土地調査局、臨時台湾基隆築港局、臨時台湾工事部などの組織がこれにあたる。

最も多くの卒業生が任用された中央官庁部門の臨時台湾土地調査局を例にあげると、最初にここに赴任したものは六六名に達する。土地調査が終わるに従って、この技術人員の処理が行なわれた。臨時調査土地調査局出版の『臨時台湾土地調査事業概要』には、次のように記されている。

……三十六年四五月頃から段々職員に過剰を生ずる様になりましたので、何ういふ風に此過剰員の始末を致したかと申し上げますと、今日業務を終へて、実地を引揚げて歸局致しますれば、即時に辞表を提出させまして免職を致し勿々家事の取片付を致させまして、船便を取極め早さと内地へ歸へらせましたので、……後には一時に多数の過剰員を出す様になりましたから、洵も一々辞表を提出させるといふ、煩雑な手續を履む暇がないので過剰員となった時には、當然退官となります様に、勅令案を起草して、其筋へ進達になりましたが、此勅令案は分限令に對する甚しき除外例である……^⑤。

このことから台湾総督府は、当該局の任務が次第に完成し、過剰人員が発生するとあたりまえのように退職させ、すぐに日本国内へ送り返すという政策をとっていたことがわかる。臨時台湾土地調査局が初任地であった六六名について見てみると、殉職した一名を除く、四六名の退官後の動向については、総督府の公文書から確認することができない。おそらく、多くのものは、任務終了後、すぐに帰国したものと思われる。帰国後の動向がわかる七名のものについては、二名が地方官庁技手、一名が中央官庁技手、四名が陸軍陸地測量部の職に就いている。そのほかの一二名のものは、台湾の官庁に留任したことが確認できる。この一二名の就職先は、一名が鉄道敷設部技手、一名が臨時台湾基隆築港局技手、一名が民政部殖産局事務嘱託、八名が地方官庁技手の職である。台湾に残った者に関して言えば、台湾総督府地方官庁の職に就いた者が一番多いことがわかる。

臨時台湾土地調査局以外の分野においても、工手学校卒業生は活躍しており、長期的にみると、鉄道部に九名、民政部土木局に（含む臨時土木部、土木課、営繕課）三四名、地方官庁の技手、技師に三〇名の者が職を得ている。臨時台湾土地調査局以外の官庁については、はっきりした集中現象は見られない。したがって、当該校卒業生たちは、土地調査事業で重要な役割を果たしたこと以外にも、土木局、鉄道部、地方官庁の土木部門において一定の勢力を有してい

たことが確認できる。

（三）日本国内、朝鮮への移動

経歴資料によれば、來台して職に就いた後、日本国内へ移動したものの八名の内三名がその後、朝鮮へと渡っている。日本へ戻った人たちの帰国後の仕事は、逋信省鉄道部作業局（二人）、農商務省札幌鉱山（一名）、陸軍省陸地測量部（三人）、新潟県（二人）、北海道土木部（一人）、大阪府堺市役所（一人）といった、中央および地方官庁の仕事が中心であった。その中の井藤種次は、台湾総督府殖産局技手を離職した後、台湾における土地調査と林野調査の経験を使い、一九一三年朝鮮総督府臨時土地調査局技手となった。土岐佐久次は、台湾臨時土地調査局離職後、一九一三年朝鮮総督府臨時土地調査局技手となり、千村萬吉は台南庁離職後、一九一四年三月に朝鮮総督府臨時土地調査局技手に就いている。

この他に、注目すべき点は、やむを得ず一時帰国したものの、再び機会を見つけ、積極的に台湾に戻って来た例である。たとえば、井藤種次、布施謹吾、千村萬吉、土岐佐久次はみな臨時台湾土地調査局の仕事が終わったあと、あるいは、当該局が廃止された後に、自らは望まないものの帰国し、井藤と千村、土岐は陸軍省陸地測量部、布施は農商務省で職についた。しかしその後再び機会を見つけ、台湾に戻っている。そして、井藤は嘉義庁技手、千村と布施は

台南庁の技手、土岐は台東庁の技手についた。森鉦太郎は一度帰国した後、逋信省鉄道作業局の職に就き、その後再び来台し台湾総督府民政局土木局の仕事に就いた。八人の内五人が帰国後、再び台湾に戻って来た要因の一つとして、台湾官庁の給料が日本の給料よりも、遙かに高額であったことがあげられる。

6. 官庁、業界間の移動

一二三名の卒業生の内、來台後、民間業界において職を経験したものは三九名で三一・七％である。日本統治初期においては、治安およびインフラが未成熟の状況であり、台湾へ進出する民間企業は少なく、それゆえ、実際に比率も少ないと言わざるを得ない。その中で一三名は、來台後すぐ民間企業の職に就いている。もしかするとこれらの人びとは、もともと日本の民間業界の職に就いていたものの、会社の台湾進出に伴い派遣され台湾に来たのかも知れない。たとえば、森田英男、山口楠夫、富岡雄渡治、原田斧太郎、畑谷純一郎など五人は藤田組瑞芳鉦山、太田半五郎、坂西修広、園部良治など三人は久米興業事務所、与田久吉は志岐組台南支店、安田靖太郎は汽車製造合資会社台北支店、平松克太郎は鹿島組台南出張所、手島英輔は台南橋仔頭製糖会社の職についている。これらはいずれも日本国内の企業が台湾進出したことにより、支店が設置されている。

この時期、官庁の職についた一〇六名中、六六名は臨時台湾土地調査局の仕事に就き、多くは段階的な任務が終わった後に帰国していることから、在任期間が短いといえる。その他の官庁の職に就いた四〇人中、八人は一時期官庁で仕事をした後、民間企業へ転職している。この数二〇％を占める。一名が比較的特殊な高級遊楽園「御影温泉」を経営した以外は、土木関連の事業に従事するか、または、自分で事業を創業した。たとえば、新見喜三は「新見組」を創設、荒井善作は「荒井建築工務所」を創設、岩淵恕は「台湾工程社」を創設、中村熊一、太田半五郎もまた独立し土木建築請負業を経営した。そこには、前任職の官庁の経験と人脈が創業の重要な基礎となった。新見喜三の「新見組」を例に挙げると、総督府官庁とお互いに一定程度の信頼関係があることから、官庁の工事の取得、工事の監督などが順調、円滑になった。それゆえ、工事の主要な相手先は、総督府交通局鉄道部、台中州土木課、台湾軍經理部、総督府内務局、台北州土木課、交通局道路港灣課、高雄州土木課、台北市役所土木課などで、全てが中央または地方官庁の土木工事であった。

東京帝国大学、京都帝国大学出身の上級技術官僚のほとんどは、およそ二年で技手から技官に昇進したが、工手学校出身の中級技術官僚は、事業の経験で専門知識と学歴などの不足を補足し、技手から技師に昇進するのに平均一九年の歳月を要した。一名技師に昇進した者の内、最も早く昇進した進藤熊之助さえも一三年の歳月を

要し、最も遅かった公莊勝二郎に至っては、二五年の時間を経てようやく技師になった。このような昇進の状況から考えると、帝大出身者が長期にわたり官職についているのに対し、工手学校の中級技術人員が途中で民間業界に転じているのも無理はない。

工手学校卒業生の来台前の経歴、来台後の就職と活動状況から、卒業生が日本統治初期に植民地台湾の官庁、あるいは、民間企業で十分に活躍していたことが見てとれる。植民統治期において、民間企業、官庁、技術者養成学校は、産・官・学の連携関係をもっており、植民統治当局が、推進する各種政策に大きな役割を果たした。

四、結論

日本は明治維新以降に近代化に向かって邁進し、殖産興業にも力を注いだ。この過程の中で、官庁あるいは民間業界を問わず技術の人材が不足し、はじめのころはお雇い外国人に依存していた。東京帝大、東京職工などの技師クラスの技術者を養成する学校はわずかであり、技師と職工、臨時雇いの労働者、鉱山労働者など中級技術人員「工手」（技手、職工長）を養成する学校は更に足りなかった。

このような背景のもと、渡辺洪基などの旧幕臣は「技術立国」の構想をもち、「工業立国」の理念を持つ民間企業家とともに、互いに助け合い、互いに支援しあう形で一八八七年一〇月工手学校を創立させた。

工手学校のはじまりは夜間学校で、「一方で仕事をし、その一方で学習する方式（仕事と学習を両立させる形で）」を以て、実業教育を推進していた。工手学校は「東大系」の華麗な教員に呼びかけ、たえず専門学問の教育を伝授し学問を深めていった。そして、少なくない優秀な卒業生を養成した。明治初期、日本の官側は都市整備を推進し、鉄道の敷設、通信網の拡大、港湾の築港、あるいは、民間企業、たとえば三井、三菱、住友、古河が経営する土木業、石炭業など、官民に関わらず工手学校の卒業生の活躍を見ることができ、重要な役割を果たしていることがわかる。初期の卒業生は、日本国内で活躍し、「技術立国」と「工業立国」の役目と機能を發揮していることが十分に見て取れる。

注目すべき点は、工手学校の発展が日本帝国主義の対外的な拡張に歩調を合わせている点であり、工手学校と帝国官庁間が微妙な官学連関関係で相互支援を行っている点である。日清戦争後、日本は初めての植民地台湾を獲得した。台湾の近代化を推進するにあたっては、各部門への人材投入が必要であったが、国内市場においても人員の需要があり、始めのころは、工手学校の卒業生の就職先も国内に向いていた。仮にこのような状況であっても、毎年、少なくとも数人の卒業生が台湾にやってきており、日露戦争までに一番人気のある海外活躍地になっていた。日露戦後、さらに多くの卒業生が韓国、清国（主として、満州）に職を求め、植民地経営に関与し、国

策的な任務を支援した。工手学校の学則と学制の改正、学科の増設、学生数の増加などの同校の発展は、すべて日本の業界、帝国の拡張、植民地経営などの事業に対する人員の需要と関わりを持っていた。管理長の古市公威は、満蒙経営は「日本の天職」といって、いつも学生を励ました。国家の対外発展に工手学校が対応しているという特徴が現れている。言い換えれば、卒業生たちは、日本国内における「技術立国」、「工業立国」の使命を果たした後に、日本帝国の拡張に伴い、一歩進めて植民地において国策協力の役目を担った。

来台した卒業生の状況を分析してみよう。日本が台湾を領有してから日露戦争前の期間に關していえば、師長、先輩の励まし、または、高額の給与という理由から、台湾で就職することは工手学校卒業生の優先的な選択の一つであった。それゆえ、台湾は東京府、福岡県、北海道、大阪府につぐ、五番目の志望先であった。学生が卒業後すぐに来台したケースや日本国内における仕事を經ての来台したケースがあるが、いずれを問わず、多くは、日本の中央官庁、地方官庁、軍部の土木、營繕、交通などの機関、または、民間鉄道、建築、土木請負、鉦山、電力などの会社での実習経験があり、植民地台湾の諸事業にすぐ投入することができた。日本統治初期、台湾総督府が急いで行った土地調査、鉄道、港湾、道路、上下水道、河川、埤圳などの事業に土木科、造家科、機械科、採冶科のたくさんの卒業生が職を求めた。一〇年間一二八名の卒業生が来台している

ことから、工手学校（特に土木課…七〇・九%）が、台湾総督府の中間技術者の重要な供給源の一つであったことがうかがえる。

この時期に台湾に來た卒業生の初任地は台湾総督府、陸海軍の土木、交通などの機関に集中しており、その数は、全体の八六・二%に相当する。それに対し、鉦業、土木業、建築業、製糖業などの民間企業が一〇・五%、最も少ない地方官庁に至っては、わずか三・三%であった。彼らの専攻と就職の観点から見ると、来台後、卒業生は学んだことを実際に役立てており、台湾にその専門の發揮場所を求めている。また台湾総督府は、官庁内における人員要求に対し、「委託養成」を依頼するかたちで、工手学校にその人材を求めた。この時期の官庁は、工手学校卒業生の主要な活動場所であり、約九割の卒業生が官庁に職を得て、総督府官庁の各種事業を積極的に支援した。

次に、来台した卒業生の移動の点から見ると、初期においては軍から台湾総督府官庁に移動し、多くは、最初に陸軍省の雇員の身分から台湾総督府の雇員へと変わった。このほか、台湾総督府中央、地方官庁中の土木建築関連部門が多いので、事業の推進の求めに応じ相互支援、または、臨時組織機構の成立、廃止によって移動が行われた。卒業生の長期にわたる台湾総督府官庁の分布と移動を見ると、臨時台湾土地調査事業に重要な任務を果たしたほかに、土木局、鉄道部、地方官庁の土木部門において一定の勢力を有してい

た。八名の台湾総督府官庁から日本陸軍省、中央、地方官庁、および、臨時朝鮮土地調査局に移動しているが、半数は臨時台湾土地調査局の撤廃により仕方なく帰国した。その中の五名は、その後、再び台湾へ戻っている。その背景には、台湾官庁給料が日本よりも遙かに高額であった点があげられる。

来台した卒業生の内、三一・七%の卒業生が民間企業に就職しているが、治安およびインフラが未成熟な日本統治初期であることを考えると決して低い数字とはいえない。そのうちの一名は日本の民間業界から台湾の発展に伴い会社からの派遣として来台している。この類の卒業生の場合は、官庁への移動はあまりなかった。反対に、官庁に就職したもので、一定の時を経て、民間業界へと昇進するものが少なからずいた。多くの人びとは、官庁にいた時の経験、人脈を生かした事業を創業しており、土木、建築請負などの仕事を創業する人が多かった。以上から、卒業生は民間業界、とりわけ土木建築業において、重要な役目を果たしたことがわかる。

一八九五～一九一五年の二〇年間に札幌農学校卒業生一四〇人が来台し、台湾総督府、中央・地方官庁の農業部門及び民間製糖会社で重要な役割をはたしていた⁵⁴一方、工手学校の卒業生は一八九五～一九〇五年の一〇年間で、一二八人來台し、中央・地方官庁の土木・交通部門及び民間の土木建築業界で活躍し、その重要性も無視できない。

本論文では、日本領台から一〇年間における、工手学校卒業生の台湾での就職、活動、移動に関する分析を通じて、「技術立国」から「技術殖民」⁵⁵へ向かう傾向を明らかにした。すなわち、日本の対外拡張期において、卒業生の多数は依然として国内で就職する一方、卒業生が日本統治初期に植民地台湾の官庁、民間企業でも十分に活躍していたことも見てとれる。民間企業、官庁、技術者養成学校は、産・官・学の連携関係をもっており、植民統治当局が、推進する政策に大きな役割を果たした。即ち日本が植民地台湾を統治する背後には、技術官僚、技術者を後ろ盾とし、各種の殖民政策を支えていた。そのゆえ、技術者養成学校は台湾総督府に不可欠な人員の補充場所だった。その一つは工手学校があった。日本帝国の勢力範囲が満州、朝鮮（韓国）に及ぶにしたがい、植民統治方針も変わって行き、工手学校卒業生の海外の活動場所も段階的に変化していった。今後は、この点についても研究を進めていきたい。

* 本論文は交流協會日台交流中心二〇〇八年度日台研究支援活動の成果の一部である。

出典

工手学校同窓会『工手学校同窓会会員名簿』（工手学校同窓会誌第一〇號附録）、明治三五年、一〇五一頁。明治三六年、一〇四九頁。明治三七年、一〇六一頁。『同』（工手学校同窓会誌第一八號附録）明治三八年、一〇六三頁。

工学院大学専門学校同窓会『専門学校のあゆみおよび会員名簿』東京・工学院大学専門学校同窓会、平成五（一九九三）年。

工手学校同窓会『工手学校同窓会誌』第二〇一八號、東京・工手学校同窓会、明治三二〇明治三八年。

太田肥洲『新台湾を支配する人物と産業史』台北・台湾評論社、昭和一五年。

上村健堂『台湾事業界と中心人物』台北・台湾案内社、大正八年。

大園市藏『台湾人物誌』台北・谷澤書店、大正五年。

唐澤信夫『台湾紳士名鑑』台北・新高出版社、昭和一二一年。

台湾新民報社調査部『台湾人士鑑』台北・台湾新民報社、昭和九年版。

菅武雄『新竹州の情勢と人物』台北・台北刷株式会社、昭和一三年。

『土木の人物』。

台湾大觀社『最近の南部台湾』台南・台湾大觀社、昭和一三年。

台湾教育会『芝山巖誌』台北・台湾教育会、昭和八年。

台南新報社編『南部台湾紳士録』台南・台南新報社、明治四〇年。

台湾神社社務所『建功神社誌』台北市・台湾神社社務所、大正五年。

工学会『工学会誌』一五七〇二八一號、東京・工学会事務所、明治二八年。

明治三八年。

『台湾総督府公文類纂』

「青山悦應技手ニ任用（原議ハ第三卷新任ノ部（六二）（六三）ニ纂輯ス）」、

明治三三年四月一日、一一八卷、四三一〇冊、三六號、「青山悦應（技手ニ任用）」同日、一二〇卷、四三一二冊、五號、「技手青山悦應測量監督ヲ命セラル」、同三五年六月一日、一五〇卷、四三四二冊、七八號

「技手青山廉次郎依願免本官」、明治三五年二月一日、第一五一卷、四三四三冊、七五號

「技手伊藤徳治郎昇級」、明治三五年三月一日、第一五〇卷、四三四二冊、三號

「井藤種次（技手ニ任用）」、明治三三年三月一日、一一八卷、四三一〇冊、

三三號、「嘉義庁技手井藤種次総督府技手任命件」、同四四年五月一日、五卷、一八八六冊、一號、「府技手井藤種次（朝鮮土地調査局へ出向）」、大

正二年六月一日、六卷甲、二二九一冊、二六號

「恩給證書下付（磯田清之助）」、大正一〇年五月一日、三卷、三三三五冊、八號

「臨時土木部技手今村熊一非職」、明治三〇年六月一〇日、第一一巻、二〇二冊、二九號

「上野左司摩鋳業ニ關スル事務ヲ囑託ス」、明治四一年一〇月一日、第一〇巻、

一四四三冊、三一號、「技手上野左司摩日英博覽會準備補助委員ヲ命ス」、

同四二年一〇月一日、第二二巻、一五六六冊、六二號、「府技手上野左司摩（免本官、賞与、賜金）」、大正二年四月一日、第四巻、二二八九冊、

四九號

「技手内田和二郎依願免本官」、明治三六年一〇月一日、一六〇巻、四三三二

冊、三七號

「梅田清次（任府技手）」明治四五年七月一日、第七卷、二〇六八冊、七一號、
「恩給證書下付（梅田清次）」大正一年六月一日、第三卷、三二六六冊、
四號
「大曾根誠二（技手二任用）」明治三五年六月一日、一四七卷、四三三九冊、
七號
「技手大河内留八郎依願免本官」、明治三六年一〇月一日、一六〇卷、
四三三二冊、三六號
「太田半五郎任交通局技師、俸給、依願免官、賞与」、昭和三年六月一日、
一〇〇五一冊、一一三三號
「元技手緒方龍太郎退官賜金給与」、明治三六年一〇月一日、第一八三卷、
四三七五冊、八七號
「岡積幸（技手二任用）」明治三四年三月一日、一三二卷、四三三三冊、七
號
「岡直任台灣総督府技手」、明治四五年三月一日、第三卷甲、二〇六三冊、
八二號、「岡直任花蓮港庁技手」、大正五年三月一日、第三卷乙、二五八〇
冊、七三號
「岡本淺次郎（臨時台灣土地調査局技手二任用）」明治三四年八月一日、
一三七卷、四三一九冊、一〇號
「柏岡陽一恩給證書下付」、大正三年一月一日、第八卷、一二一〇冊、三號
「元技手倉持壽吉勉勵賞与」、明治三七年三月一日、第一九三卷、四三八五冊、
七五號
「小川陽吉任台灣総督府技手」、明治四五年三月一日、第三卷甲、二〇六三冊、
八二號、「府技手小川陽吉退官及賜金ノ件」、大正三年五月一日、第五卷甲、

一三三三冊、一號
「（台南州技手）尾辻国吉（任府州技師）」大正一〇年三月一日、二卷、
三一九一冊、二五號、「（府技師）尾辻国吉（專賣局技師任用）」同一
七月一日、五卷、三四四八冊、三一號
「笠原藤藏任技手（元台北県）」明治三四年一〇月一日、五四卷、九三〇九冊、
三八號
「元技手梶山彌四郎退官賜金給与」、明治三六年一〇月一日、第一八三卷、
四三七五冊、八九號
「囑託下條禎一郎昇給、賞与、解職ノ件」、大正三年七月一日、第七卷、
一三二七冊、三號
「恩給證書下附（金子泰輔）」大正四年六月一日、第四卷、二三四四冊、
一三號
「河田千代治（技手二任用）」明治三三年七月一日、一二二卷、四三二三冊、
一五號、「元技手河田千代治退官賜金給与」、同三六年二月一日、一八三
卷、四三七五冊、九六號
「喜多見善藏（技手二任用）」明治三三年五月一日、一二〇卷、四三一二冊、
九號、「技手喜多見善藏依願免本官」、同三五年一月一日、一五一卷、
四三三三冊、五〇號
「木梨二郎（雇ニ採用）」明治三三年六月一日、一二六卷、四三一八冊、
二三號、「木梨二郎（技手二任用）」同三四年三月一日、一三一卷、
四三三三冊、八號、「技手木梨二郎依願免本官」、明治三五年一月一日、
一五一卷、四三三三冊、五二號
「公莊勝二郎府技手」、明治四一年六月一日、第六卷、一四三八冊、一七號、

- 「公莊勝二郎台南州土木技師ニ兼補ス」、昭和二年一〇月一日、一〇〇四九冊、二七號、「公莊勝二郎任総督府技師、俸給、勤務、依願免官、願ニ依リ本職ヲ免ス」、同五年七月一日、一〇〇六一冊、二八號
- 「技手国澤能正依願免本官」、明治三六年五月一日、一五八卷、四三五〇冊、五一號
- 「国乗耕馬（技手ニ任用）」、明治三三年二月一日、一二五卷、四三一七冊、九號、「技手国乗耕馬分限令三條一項三號ニ依リ免官」、同三六年一二月一日、一六〇卷、四三三二冊、四六號
- 「臨時陸軍建築部技手後藤麟三郎ヲ総督府技手ニ任シ民政部土木局勤務ヲ命ス」、明治三五年一月二十九日、一九卷、八〇〇冊、三二號、「恩給證書下附（後藤麟三郎）」、大正四年七月一日、五卷、二三四五冊、五號
- 「元技手小柳貞一外一名勉勵賞与」、明治三年七月一日、第一九三卷、四三八五冊、一四二號
- 「臨時陸軍建築部技手小山廉一総督府技手ニ任ス」、明治三三年五月二十九日、八卷、五六八冊、二九號
- 「台北県ヨリ出向ノ技手齊藤元喜本県技手ニ任用ノ件（元台南県）」、明治三八年一〇月一日、第三八卷、九五六〇冊、五二號
- 「臨時土木部技手崎山元楠外二名（石原周敏、今村熊一）在勤所屬命免ノ件」、明治二九年八月三日、第六卷之二、一〇九冊、八號
- 「元技手佐佐木為治勉勵賞与」、明治三七年五月一日、第一九三卷、四三八五冊、一〇六號
- 「重永壯吉（技手ニ任用）」、明治三五年四月一日、一四二卷、四三三四冊、二三號、「元府技手重永壯吉普通恩給証書送付ノ件」、大正一三年四月一日、六卷、三七六〇冊、一三號
- 「府鉄道部技手進藤熊之助阿里山作業所技手ニ転任ノ件」、明治四三年五月一日、五卷、一七二三冊、三六號、「阿里山作業所技手進藤熊之助（任阿里山作業所技師）」、大正一年八月一日、七卷、二〇五七冊、一〇號、「阿里山作業所技師進藤熊之助（昇等、昇級、賞与ノ件）」、同三年二月一日、一卷、二二九五冊、二八號
- 「杉本金太郎新竹防空委員会委員ヲ命ス」、昭和二年一月一日、一〇〇九一冊、七〇號、「杉本金太郎（新竹州賃金委員会委員ヲ命ス）」、同一年一月一日、一〇一〇〇冊、一六號
- 「鈴木楠雄台湾総督府技師ニ任用ス」、明治三三年七月十五日、一一卷、五七一冊、三一號、「蘇澳大濁水溪間道路豫定線調査復命ノ件（技手鈴木楠雄）」、同四年八月一日、六九卷、五一三冊、二五號（有目無文）、「府技手鈴木楠雄（蕃務本署兼務ヲ命ス）」、同四五年四月一日、四卷、二〇六五冊、七〇號、「恩給證書下附（鈴木楠雄）」、大正五年一月一日、五卷、二四八〇冊、一八號
- 「高崎才藏台湾総督府雇員ニ命ス」、明治三三年七月一日、一一卷、五七一冊、三四號、「恩給證書下付（高崎才藏）」、大正三年一〇月一日、七卷、二二一八冊、一八號
- 「台北庁技手高見謙次（賞与、免官）」、大正三年五月一日、五卷乙、二二三四冊、三五號
- 「阿緞庁技手田淵德太郎任府技手ノ件」、明治四四（一九一一年）一月一日、一〇卷甲、一八九二冊、四二號、「技手田淵德太郎（賞与、昇級、免官職）」、大正四年三月一日、三卷甲、一、二四五五冊、三九號、「恩給證書下附（田淵

徳太郎」、同四年六月一日、四卷、一三四四冊、一四號

「動八等千村萬吉任台南庁技手」、明治四四年四月一日、四卷、一八八五冊、

一〇六號、「技手千村萬吉勉勵賞与」、同三八年三月一日、一八六卷、

四三七八冊、一三號、「台南庁技手千村萬吉（朝鮮總督府臨時土地調査局

へ出向ヲ命ス」、大正三年三月一日、三卷甲、二三〇八冊、三一號

「中條武通（技手ニ任用）」、明治三四年二月一日、一三八卷、四三三〇冊、

一六號、「技手中條武通依願免官」、同三七年一月一日、二七七卷、

四四六九冊、一九號

「塚田金市郎ニ雇ヲ命スル件」、明治三九年三月二〇日、三卷、一二三四冊、

四八號、「工部部技手塚田金市郎兼任總督府技手」、同四二年二月一日、二

卷、一五五六冊、一二二號、「嘉義庁技手塚田金市郎鐵道部へ出向」、同四一

年七月一日、七卷、一四三九冊、五一號

「（元府庁技手）土岐佐久次普通恩給證書下賜」、大正一四年七月一日、第

一三卷、三八七七冊、一二三號

「豊島義章（技手ニ任用）」、明治三二年三月一日、一一八卷、四三一〇冊、

三三號

「元技手内藤祐藏在職中ノ行為及退官ノ理由ニ關シ兵庫縣知事へ回答ノ件」、

明治三六年二月一日、第一六二卷、四三五四冊、七八號

「技手中村魁次依願免本官」、明治三六年六月一日、第一六〇卷、四三三五冊、

一三號

「新見喜三（技手ニ任用）」、明治三二年三月一日、一一八卷、四三一〇冊、

三三號、「技手新見喜三（臨時台灣鐵道敷設部技手ニ転任）」、同三二年五

月一日、一一三三卷、四三一五冊、一一號

「西田恒敬（雇ニ採用）」、明治三二年一月一日、第一二三卷、四三一四冊、

三五號、「西田恒敬外一名任南投庁技手」、同四〇年九月一九日、第一五卷、

一三四四冊、一〇號、「南投庁技手西田恒敬休職」、同四一年三月一日、第

三卷乙、一四三三冊、八一號

「長谷川目藏台北水道事務所技術員ヲ命ス」、明治四二年五月一日、第六卷、

一五六〇冊、三號

「技手早川喜太郎依願免本官」、明治三五年四月一日、一五一卷、四三三三冊、

六三號

「技手林喜太郎昇級（元台中縣）」、明治三二年六月一日、第一四卷、

九四〇〇冊、五七號

「藤井澤雇ニ採用（元台南縣）」、明治三四年一月一日、第四一卷、九五六三冊、

四號、「藤井澤任台灣總督府技手」、同四五年三月一日、第三卷甲、

二〇六三冊、八二號、「技手藤井澤昇級、賞与、免官、退官賜金」、大正四

年四月一日、第四卷乙、二四六〇冊、四五號

「藤村太吉（雇ニ採用）」、明治三二年二月一日、一二三卷、四三一四冊、

四四號、「藤村太吉（技手ニ任用）」、同三三年六月一日、一二六卷、

四三一八冊、一三號、「技手藤村太吉三角測量監督兼事務監督ヲ命セラル」、

同三五年四月一日、一五〇卷、四三三二冊、七四號、「元技手藤村太吉勉

勵賞与」、同三七年三月一日、一九三卷、四三八五冊、七五號

「技手藤原堅三郎昇給、依願免、退官賜金」、明治四一年三月一日、三卷乙、

一四三三冊、八六號

「布施謹吾恩給証書下付」、大正九年四月一日、第八卷乙、二九一八冊、四號、

「布施謹吾（臨時台灣土地調査局技手ニ任用）」、明治三四年九月一日、

一三七巻、四三九冊、一〇號

「本多都燈台建築事務ヲ囑託一ヶ月貳拾五円」、明治三〇年四月二日、第九巻、二〇〇冊、一六號

「〔鉄道部技手〕正木喜三郎（任府鉄道部技師）」、大正九年一月一日、九巻、三〇九五冊、二三號、「正木喜三郎昇級、退官、賞与、退官、賞与」、昭和一年八月一日、一〇〇八三冊、六五號

「松井綠彌恩給證書送付ノ件（台北庁）」、明治四三年九月二九日、一二巻、一六一一冊、一〇號

「松岡清藏、森房吉、諸隈利三郎雇ニ採用ノ件」、明治三二年四月五日、一六巻、四三六冊、二五號

「府技手三浦平三蕃地出張中加俸給スノ件」、明治四四年一月一日、第一巻、一八八〇冊、四九號、「台湾総督府技手三浦平三依願免本官」、大正三年一月一日、第一巻、一三〇五冊、一三號

「通信技手嶺謙也外一名転勤ノ件」、明治三九年一〇月一九日、一五巻、一二三六冊、八一號、「嶺謙也勤務所命令」、同四〇年一月二八日、一巻、一三三〇冊、四五號、「通信技手嶺謙也（通信局勤務ヲ命ス）」、同四五年七月一日、七巻、二〇六八冊、一〇號、「通信技手嶺謙也（嘉義郵便局勤務ヲ命ス）」、同、一七號、「通信技手嶺謙也（嘉義郵便局勤務ヲ免ス）」、大正五年一月一日、一一巻、二五九一冊、一二號、「嶺謙也陞格、俸給」、同一年一月一日、一巻、四〇〇〇冊、三八號、「嶺謙也昇級、依願免官、賞与」、昭和四年七月一日、一〇〇五七冊、四七號

「技手宮坂正八郎休職」、明治三六年二月一日、第一六一巻、四三三三冊、七號、「故技手宮坂正八郎遺族〔宮坂スベ〕へ死亡賜金給与ノ件」、同三六年

六月一日、第一八二巻、四三七四冊、四四號

「村松利太郎（雇ニ採用）」、明治三四年六月一日、一三四巻、四三二六冊、二七號、「技手村松利太郎依願免本官」、同三五年一〇月一日、一五一巻、四三三三冊、七二號

「森田正太郎官有家屋借用願取消願ノ件（元台南県）」、明治三〇年一月一日、第七巻、九八七二冊、八號

「府技手森鉦太郎退官賜金ノ件」、大正三年六月一日、第六巻甲、二三一五冊、三六號、「森鉦太郎任府技手」、同一年一〇月一日、第一〇巻甲、二〇七一冊、二號

「恩給證書下付（矢田貝静睦）」、大正三年一月一日、八巻、二二一九冊、五號

「〔府技手〕八板志賀助（任府技師）」、大正一一年五月一日、三巻、三四四六冊、七〇號、「八板志賀助任督府技師、俸給、勤務」、昭和二年一〇月一日、一〇〇四九冊、一二號、「〔府技師〕八板志賀助（米穀局總務課兼務ヲ命ス）」、同一年一月一日、一〇一〇八冊、四二號

「矢代貞助臨時土木部雇ヲ命ス月俸三拾五円」、明治三〇年三月三日、第五巻、一九六冊、二三號、「臨時土木部雇矢代貞助嘉義県へ出向ヲ命ス」、同年九月二日、第六巻、一三三三冊、七號、「民政局臨時土木部雇矢代貞助本県技手（六級俸）ニ任用ノ件（元嘉義県ノ部）」、同三七年九月一日、第二二巻、九五三四冊、二七號

「雇員八島震外二名（篠村啟太郎、小出周太郎）台北県兼勤ノ件」、明治二九年二月二九日、第一巻之二、一〇三冊、五四號、「八島震外一名（古谷傳）雇員辭令日付更生ノ件副官部第二課長へ照会ノ件」、同二九年三月一日、

第二卷、四三冊、一號、「嘉納弘外一名（伊藤榮之進）屬任命八島震外一名（木村德）技手任命」、同二年五月四日、第一卷之一、一〇二冊、三號、「技手八島震任台中県技手」、同三年五月六日、第七卷、四五七冊、一八號

「台中庁屬兼技山口茂樹總督府技手ニ任ス」、明治三六年九月一〇日、第一五卷、九一九冊、二六號、「山口茂樹技師不任用ノ」、同四五年四月一日、第四卷、二〇五四冊、二五號、「台北庁山口茂樹恩給証書送付」、大正二年五月一日、第七卷、二〇九四冊、七號、「囑託山口茂樹勤務ノ件」、同年一月一日、第一卷乙、二二〇〇冊、三七號、「囑託山口茂樹解囑」、同六年六月一日、第六卷、二七五六冊、一號

「技手山田市郎依願免本官」、明治三六年九月一日、一六〇卷、四三三二冊、三三號

「東京府士族山野繁輝雇ニ採用ノ件（元台南県）」、明治三〇年七月一日、九卷、九五三二冊、一一九號、「屬山野繁輝依願免官ノ件（元台南県）」、同三年八月一日、三七卷、九五五九冊、一六號

「山本安治（技手ニ任用）」、明治三二年五月一日、一二〇卷、四三二二冊、一二號、「技手山本安治図根測量員ヲ命セラル」、同三五年七月一日、一五〇卷、四三四二冊、八三號、「技手山本安治勲勵賞与」、明治三七年六月一日、一九三卷、四三八五冊、一一六號

「元技手弓削銀一郎退官賜金給与」、明治三六年一〇月一日、一八三卷、四三七五冊、九〇號

「元土地調査局技手吉井九郎へ恩給証書送付ノ件」、明治三七年四月二〇日、一〇〇卷、九三七冊、三一號、「海軍技手吉井九郎（技手ニ任用）」、同三三

年三月一日、一二五卷、四三二七冊、一一號

「技手吉田文次郎依願免本官」、明治三六年六月一日、一六〇卷、四三三二冊、一五號

「恩給証書下付（吉岡寅之助）」、大正二年一月一日、九卷、三三二二冊、二〇號、「吉岡寅之助（雇ニ採用）」、明治三二年五月一日、一二〇卷、四三二二冊、一六號

「技手好富信太郎依願免本官」、明治三四年八月一日、第一四〇卷、四三三二冊、四〇號

註

（１） 吳文星「東京帝國大學與臺灣「學術探檢」之展開」『臺灣史研究』一百一年「回顧與研究」臺北：中央研究院臺灣史研究所籌備處、一九九七年、一一～二八頁。

（２） 吳文星「札幌農學校と台灣近代農學の展開——台灣總督府農事試験場を中心として——」『日本統治下台灣の支配と展開』名古屋：中京大学社会科学研究所、二〇〇四年、四八一～五二二頁。「京都帝國大學與臺灣舊慣調査」『師大臺灣史學報』一期、二〇〇七年、二九～四八頁。

（３） 岡本真希子『植民地官僚の政治史——朝鮮・台灣總督府と帝國日本』東京：三元社、二〇〇八年。

（４） 松田利彦編『日本の朝鮮・台灣支配と植民地官僚』京都：思文閣出版、二〇〇九年。

- (5) 蔡龍保「長谷川謹介と日本統治時代台湾の鉄道発展」『現代台湾研究』第三五号、二〇〇九年、一～二二頁。
- (6) 蔡龍保「日治時期台湾總督府之技術官僚―以土木技師為例」『興大歷史學報』第一九期、二〇〇七年、三〇九～二九〇頁。
- (7) 蔡龍保「推動時代的巨輪…日治中期的台灣國有鐵路（一九一〇―一九三六）」台北…台灣書房、二〇〇七年、七八頁。
- (8) 茅原健『工手学校 旧幕臣たちの技術者教育』東京…中央公論社、二〇〇七年、一三～三〇頁。
- (9) 福井藩は諸藩の中で、最も早くから見込のある青年を海外に派遣留学させ、また海外から講師を藩内に招聘し、子弟の教育を行った、開明的な藩であった。
- (10) 茅原健『工手学校 旧幕臣たちの技術者教育』、五三～七二頁。
- (11) 同上、一二九頁。
- (12) 同上、九五～一〇八頁。
- (13) 日本工学会『明治工業史 土木編』東京…学術文献普及会、一九七〇年、一一〇四～一一〇五頁。
- (14) 工学院大学学園史編纂委員会『工学院大学学園百年史』東京…工学院大学、一九九三年、三三頁。
- (15) 天野郁夫『大学の誕生（上）帝国大学時代』東京…中公新書、二〇〇四年、五五～五六頁。
- (16) 茅原健『工手学校 旧幕臣たちの技術者教育』、三一～四〇頁。
- (17) 授業時間は午後四時から一〇時迄であった。工手学校『工手学校一覽』東京…工手学校、明治二七年、九頁参照。
- (18) 工学院大学『工学院大学学園七五年史』東京…工学院大学、一九六四年、三一～三三頁。
- (19) 同上、三二～三三頁。
- (20) 茅原健『工手学校 旧幕臣たちの技術者教育』、四〇～五二頁。工学院大学学園史編纂委員会『工学院大学学園百年史』三四～三六頁。
- (21) 工手学校『工手学校一覽』、七頁。工学院『工学院五十年史』東京…工学院、昭和一九（一九四四）年、二〇～二二頁。
- (22) 工手学校『工手学校一覽』東京…工手学校、明治四一年、六～七頁。
- (23) 工学院『工学院五十年史』二九～三一頁。
- (24) 工手学校同窓会『工手学校同窓会誌』第二号、東京…工手学校同窓会、明治三二年、四四～四五頁。
- (25) 鈴木清四郎「卒業生名簿」『二十五年記念工手学校一覽』東京…工手学校、大正二年。
- (26) 茅原健『工手学校 旧幕臣たちの技術者教育』、一〇九～一二九頁。
- (27) 東京帝国大学『東京帝国大学卒業生名簿』東京…東京帝国大学、昭和一四年、二〇八～二〇九頁。
- (28) 鈴木清四郎「卒業生名簿」『二十五年記念工手学校一覽』。
- (29) 林明德『日本近代史』台北…三民書局、一九九六年、一五二頁。
- (30) 石井寛治著、黄紹恒訳『日本經濟史』台北…五南圖書公司、二〇〇八年、三三五頁。
- (31) 工学院大学学園史編纂委員会『工学院大学学園百年史』、五四～五五頁。
- (32) 工学院大学『工学院大学学園七五年史』、一九頁。

- (33) 石井寛治著、黄紹恒訳『日本經濟史』、三三五頁。
- (34) 同上、三二七―三三〇頁。
- (35) 工手学校同窓会『工手学校同窓会會員名簿』（工手学校同窓会誌第一〇号附録）、明治三五年、一―五一頁。
- (36) 鈴木清四郎「補録」『二十五年記念工手学校一覽』、一九一頁。
- (37) 林明德『日本近代史』台北…三民書局、一九九六年、一五六―一六〇頁。
- (38) 有地品之允「祝辞」『工手学校同窓会誌』第一四号、明治三五年、頁二四―二五。
- (39) 辰野金吾「告辞」『工手学校同窓会誌』第一四号、明治三五年、二六―二七頁。
- (40) 土木学会『古市公威とその時代』東京…土木学会、二〇〇四年、二九一―二九二、三〇五―三〇六頁。
- (41) 工手学校同窓会『工手学校同窓会會員名簿』、明治三六年、一―四九頁。
- (42) 工手学校同窓会『工手学校同窓会會員名簿』、明治三七年、一―六一頁。
- (43) 工手学校同窓会『工手学校同窓会會員名簿』（工手学校同窓会誌第一八号附録）、明治三八年、一―六三頁。
- (44) 工学院大学『工学院大学学園七五年史』、四六―四七頁。
- (45) 工学院『工学院五十年史』、三二頁。
- (46) 鈴木清四郎「補録」『二十五年記念工手学校一覽』、一九一―一九七頁。
- (47) このように、地域の遠近によって就職を選ぶ状況は、中後期になる

- と若干改善された。例えば、一九三〇年五月の同窓会誌上に載せられた四二件の求職資料の中で、勤務場所を指定していた者は、一五名で（二三名が東京を指定、二七名が勤務場所を指定していなかった。「就職紹介」、『東京工業会誌』第三二巻第五号、昭和五年、二三四頁参照）。
- (48) 「台北通信」、『工手学校同窓会誌』第七号、明治三四年、四八頁。
- (49) 「第二十四回卒業式場に於ける工学博士辰野金吾君の演説」『工手学校同窓会誌』第七号、明治三四年、一七―一九頁。
- (50) 「本会規則」『工手学校同窓会誌』第一三号、明治三六年、一八頁。
- (51) 工手学校同窓会『工手学校同窓会會員名簿』（工手学校同窓会誌第一〇号附録）、明治三五年、一―八頁。
- (52) 蔡龍保「日治初期台湾總督府的技术人力之招募―以土地調查事業為例」『政治大学歴史年報』三五期、二〇一二年、七五―一四四頁。
- (53) 臨時台湾土地調查局『臨時台湾土地調查事業概要』台北市…臨時台湾土地調查局、明治三九年、八八―八九頁。
- (54) 吳文星「札幌農學校と台湾近代農學の展開―台湾總督府農事試験場を中心として―」『日本統治下台湾の支配と展開』、四八一―五三二頁。

表2 1895～1905年に来台した工手学校卒業生一覧表（来台時間順）

項別 姓名	本籍	科、期別 (卒業年)	来台年 (来台任 官年数)	来台前の経歴
				在台経歴
富山朝輔	福岡	工手学校 (1891)	1895.9	1895-1898陸軍憲兵隊、その後製鹽、醬油醸造、雑貨販賣に 従事 1902料理屋経営 1905.2清水寺街高等遊樂園「御影温泉」創設 1908.4庭園座敷「御影加壇」経営
中村熊一	島根	工手学校 (1894.3)	1895.6 (5)	1894.3筑豊工業鉄道会社
				1895陸軍経理部 1895.6台湾総督府 1900.11年重禁錮で入獄 1902土木建築承包業経営
新見喜三	山口	土木 (1894.3)	1895.6 (6)	1892.4鉄道庁第一部横川出張所雇員、12月に雇員に就任 1893.12-1895.3鉄道局雇員、碓氷鉄道敷設及び全国預定線測 量に従事
				1895.3-1895.9陸軍省鉄道隊附技術員、台湾鉄道の測量及び 工事に従事 1895.9-1896.3鉄道局雇員（日給40銭） 1896.3-10日本鉄道株式会社雇員（月俸18円） 1896.10-1898.11坂鶴鉄道技士 1899.3臨時台湾土地調査局技手 1899.5臨時台湾鉄道敷設部技手に転任 1899-1904.5台湾総督府鉄道部に就職。基隆・台北・淡水間 及び曾文溪橋梁工事等現場監督主任に担当 1904.5三五公司技手、清国広東省潮汕鉄道の測量に従事 1908.2鉄道工業会社社員、岩越線第一、二工区に従事 1910.11新高帝国製糖株式会社工務係長 1913土木建築承包業新見組を創設
本多都	岩手	建築、7期 (1892.7)	1895.10	1893.3秋田県内務部第二課傭（月俸10円）、12月第二課土木 係属 1894.4湯澤警察署駒形分署、大曲監獄支署附屬工場等建築委 員
				1895.10陸軍省臨時台湾燈標建設部技手 1896.8富基角燈標を建設のため、台湾出張 1897.4台湾総督府燈台建築事務囑託
平場 徳太郎	石川	土木、2期 (1890)	1896	1896台湾総督府民政局臨時土木部技手
今村熊一	大分	土木、6期 (1892)	1896 (1)	1896台湾総督府民政局土木課 1896.8台湾総督府民政局臨時土木部技手 1897.6罹病退職
広内 竹三郎	東京	土木、19 期（1898.7）	1896.2 (3.5)	1896.2台湾兵隊第二区隊 1897.3遞信省郵便為替貯金管理所主計課員（雇） 1898.4遞信省郵便為替貯金書記補 1899.3依願免本官
				1899.4臨時台湾土地調査局技手 1903.10退官

八島震	宮城	建築、1期 (1889.7)	1896.2	1896.2陸軍省雇員兼台北県技手 1896.4台湾総督府民政局臨時土木部土木課技手 1897.11台湾総督府財務局土木課技手 1898台湾総督府民政部土木課技手 1899.5台中県内務部土木課技手
飯田豊二	静岡	土木、9期	1897 (16)	1897台湾総督府雇員 1898台湾総督府民政局通信課雇員 1899臨時台湾鉄道敷設部、鉄道部技手 1899.11-1904.12任打狗出張所主任 1910.1昇任鉄道部技師、任九曲堂派出所主任 1913.6マラリアで台南醫院で逝去
矢代貞助	千葉	建築、2期 (1890.2)	1897.3	1891.4-11帝国暫時議院建築雇（日給30銭）、1891.12-1893.2 富山県雇（日給40銭） 1894.8-12衆議院工事督役囑託（月薪12円） 1894.11-1895.4外務省修繕雇（日給45銭） 1895.6愛知県熱田尾張紡績株式会社建築係 1896.1大坂朝日紡績株式会社建築技手（月俸15円）、1896.8- 1897.1大坂紡績用品株式会社建築技手（月俸18円） 1897.3台湾総督府民政局臨時土木部雇（月俸35円）、9月任 嘉義県内務部土木課技手
佐藤 豊次郎	長野	工手学校 豫科 (1891)	1897.4 (4)	1891年工手学校豫科修了 1893東京府本科准教員乙種検定試験合格 1893.9下谷忍岡尋常高等小学校に就職 1897.4台湾総督府国語学校師範部に就職 1898.7台中国語傳習所囑託 1898.10牛罵頭公学校教諭兼校長 1901.3マラリアで逝去
山口茂樹	鹿兒島	建築、2期 (1890.2)	1897.10 (20)	1890.6陸軍近衛経営部工場監視備 1891.4東京憲兵隊本部軍吏部臨時助手 1892.9鹿兒島県川邊郡長屋尋常小学校訓導 1897.10.4臨時陸軍建築部広島支部工場監視 1897.10.25台湾守備混成第二旅團監督部備、11月台中陸軍經 営部 1898.8台中県内務部土木課技手 1901.4台中市区改正係技手兼任、11月台中庁技手に就任 1903.9台湾総督府民政部土木局技手 1905.7臨時台湾戸口調査委員 1908.7台湾縦貫鉄道全通式補助委員 1909.10台湾総督府土木部技手 1911.10台湾総督府民政部土木局技手 1913.1台湾総督府民政部土木局營繕課技師 1913.5因腦神経衰弱症依願免官、任民政部通信局兼土木局囑 託11月起専任土木局囑託 1917.5依願解囑託

齋藤元喜 (士族)	熊本	建築、5期 (1891.7)	1898.12	1884.5陸軍教導團歩兵科卒業、歩兵伍長に就任 1886.1歩兵一等軍曹 1889.5常備役期満、預備役に転換 1890.2工手学校入学、8月に東京工業学校電気工場新築工程 雇 1891.5日本銀行建築所工地見習、7月に工手学校造家学科を 卒業、8月に日本銀行建築所備（日給40銭）に担当 1892.4兵庫県内務部第二課備（月給12銭） 1893.11兵庫県内務部第二課技手、屬兼任 1894.7非常召集のため後備歩兵第11聯隊に編入、12月に陸 軍歩兵曹長に就任 1895.3兵庫県内務部第二課屬、技手兼任、5月に陸軍歩兵特 務曹長に就任、10月に山口県内務部第二課土木係技手に 就任 1897.3陸軍歩兵少尉、11月に熊本県第二課營繕主任（技手） に就任 1898.12台北県内務部土木課技手 1900.10台南県内務部土木課技手
林喜太郎	東京	建築、16期 (1897.2)	1899 (1)	1899台中県内務部土木課技手 1900.1依願免官
井藤種次	広島	土木、19期 (1898.7)	1899.3 (4)	1898.9東京市水道助手見習（月俸12円） 1899.3臨時台湾土地調査局技手 1903.12依願免本官 1904.9陸軍省陸地測量部雇員、戦地測量のため清国出張 1906.4日俄戦争に戦功あり、八等瑞寶章受勳 1907.3依願解雇 1908.7嘉義庁土木係技手、公共埤圳工事に従事 1911.5民政部殖産局技手、林野調査に従事 1913.6朝鮮総督府臨時土地調査局技手
崎山勝正 (士族)	東京	土木、20期 (1899.2)	1899.3	1899.3臨時台湾土地調査局技手
豊島義章	岐阜	土木、20期 (1899.2)	1899.3 (4)	1899.3臨時台湾土地調査局技手 1902.7図根測量員 1903.10マラリア、三叉神経痛で依願免本官
森房吉	神奈川	造家、20期 (1899.2)	1899.3 (3)	1899.3台湾総督府民政部土木課雇員（月俸30円） 台湾総督府民政土木局營繕課技手 1902.6病のため依願免官
青山悦應 (士族)	愛知	土木、11期 (1894.7)	1899.4 (4)	1895.5日本鉄道株式会社建築課備 1896.9武相中央鉄道株式会社技手 1898.5東京市土木部技手 1899.4臨時台湾土地調査局技手 1902.6北港派出所甲第二十班測量監督 1903.12退官
松本忠男 (士族)	秋田	採冶、11期 (1894.7) 土木、修業 (1899.2)	1899.4 (3)	1899.4臨時台湾土地調査局技手 台湾総督府官房秘書課技手 1902.8マラリアで在職中逝去

好富 信太郎 (士族)	山口	土木、20期 (1899.2)	1899.4 (2)	1895.2大里尋常小学校准訓導 1897.4 遞信省通信局電報調査所員 (臨時雇) 1897.8 遞信省電務局電信課員兼郵務局郵便課員 (雇) 1898.11 遞信省通信局電務課員兼郵務課員
				1899.4 臨時台湾土地調査局技手 1901.8 脳梗塞で依願免官
早川 喜太郎 (士族)	千葉	土木、20期 (1899.2)	1899.4 (3)	1899.4 臨時台湾土地調査局技手 1902.4 脳充血で依願免本官
喜多見 善藏 (士族)	岩手	冶金、9期 (1893.7)	1899.5 (3)	1894.5 陸中釜石鉱山田中製鉄所技手 1894.9 東京麻布歩兵第一聯隊 1895.6 陸中釜石鉱山田中製鉄所に復職 1896.11 陸中釜石鉱山田中製鉄所から辭職、12月に東京小石川陸軍砲兵工科学校鍛工科に入学、その後病のため退学
				1899.5 臨時台湾土地調査局技手 1902.1 脳充血で退官
柏岡陽一	大阪	土木、5期 (1891.7)	1899.5 (15)	1891.8-1892.3 内務省第四区土木監督署臨時雇 1893.9-1895.9 京都府内務部第二課雇 1895.10-1897.2 北海道釧路等13郡役所事業手 1897.3 臨時北海道鉄道敷設部事業手、工事監督補 1897.11 北海道庁鉄道部建設課事業手、深川監督区監督補 1898.3 函樽鉄道株式会社創立事務所札幌出張所技術員 1898.9-1899.2 北海道庁檜山支庁事業手
				1899.5 臨時台湾土地調査局技手 1905.1 兼任恒春庁技手、4月に恒春庁技手に就任 1907.1 鳳山庁技手 1909.7 台中庁技手 1911.9 阿緞庁技手總務課勤務 1914.3 依願免官
山本安治	新潟	土木、19期 (1898.7)	1899.5 (5)	1894.4 糸魚川郵便電信局電気通信技術員 (月俸6円) 1898.7 横浜市水道臨時建築雇 (月俸12円)
				1899.5 臨時台湾土地調査局技手 1902.6 臨時台湾土地調査局図根測量員 1904.3 勉勵賞与341円
進藤 熊之助 (士族)	茨城	土木、11期 (1894.7)	1899.5 (15)	1894.11 日本鉄道株式会社建築科備 (月俸10円)
				1899.5 臨時台湾鉄道敷設部工務課技手 1899.11 台湾総督府鉄道部打狗出張所技手 1900.5 台湾総督府鉄道部工務課技手 1904.4 台湾総督府鉄道部彰化出張所技手 1906.6 休職、藤田組嘉義出張所社員に転任、阿里山森林鉄道建設に従事 1907.5 休職期満 1908.3 台湾総督府鉄道部工務課技手 1910.4 台湾総督府阿里山作業所技手 1911.12 台湾総督府鉄道部打狗出張所技手に兼任 1912.8 台湾総督府阿里山作業所技師 1914.2 殉職、高等官6等に昇叙
松本 群太郎		工手学校	1899.6 以前	不詳

国澤能正		工手学校	1899.6 以前 (3)	1900.3臨時台湾土地調査局技手 1901.12図根測量員 1903.5マラリアで依願免官
河田 千代治 (士族)	宮城	土木、9期 (1893.7)	1899.6 (4)	1893東京土木承包業橋本組技術雇、手代囑託 1899.7臨時台湾土地調査局技手 1903.12退官、賞金80円。
松井縁彌 (士族)	愛知	土木、17期 (1897.8)	1899.9 (11)	1896.6逓信省名古屋郵便電信局書記補（月俸6円） 1899.9台湾総督府民政部土木課技手 1903鹽水港庁下潭庄樹林頭圳改修工事事務所 1908.7臨時台湾工部水利課技手 1909.10台湾総督府土木部技手 1910.4神経衰弱症で依願免本官
吉岡 寅之助	茨城	土木、18期 (1898.2)	1899.9 (23)	1893.6-1895.4茨城県稲敷郡龍寄町尋常小学校本科準訓導 1899.9臨時台湾土地調査局技手 1906.9臨時台湾基隆築港局技手 1908.7臨時台湾工部技手 1909.12台湾総督府土木部技手 1914.11台湾総督府技手兼任 1915.2免本官、台湾総督府技手専任 1922.3台湾総督府技師、同月脳神経衰弱症で依願免本官
園部良治	郡馬	土木、20期 (1899.2)	1899. (9)	1899本間鉄道工業事務所、測量に従事 1899.6久米工業事務所 1899.9事務所請け負った台湾鉄道南部線打狗、台南間第一工 区に従事 1902.6久米合名会社（久米工業事務所を継承）に入社 1913落合工業事務所北海道出張所主任に転職 1915久米合名会社に復職、北海道出張所主任、台湾出張所 主任を歴任 1920.12大和工業合資会社を創設 台湾土木建築協会常務理事
西田恒敬	鹿兒島	土木、18期 (1898.2) 東京中学校 (1899.4)	1899.11 (9)	1899.11臨時台湾土地調査局雇 1900.3臨時台湾土地調査局技手 1907.9南投庁技手 1908.3病のため、停職
正木 喜三郎	東京	土木、18期 (1898.2)	1899.11 (36)	1898.4-1899.5岩越鉄道株式会社沼上隧道工事に従事 1899.11台湾総督府鉄道部技手 1904.8鉄道部彰化出張所 1909.8-1910.5任嘉義保線派出所保線手（保線区主任） 1914.6台北保線区主任 1915.2中国の広東、福建、江西、浙江、安徽、江蘇に出張、 汕頭から潮州を経約40哩の路線を踏査 1920.9鉄道部台中建設事務所長心得 1920.11台湾総督府鉄道部技師、鉄道部台中建設事務所長 1923.2神経衰弱症で依願免本官、台中建設事務所長兼任 1927.9鉄道部北部改良事務所長 1935.8病のため退官

藤井 渥	広島	建築、21期 (1899.7)	1899.11 (16)	1897.12海軍省経理局技生（雇、日給35銭） 1899.11台湾総督府民政部土木課雇 1901.1台南県内務部土木課雇（月俸30円）、11月任台南庁雇 1902.2台湾銀行總務部庶務課雇（月俸40円） 1906.2台中支店建築工事監督 1907.2明治製糖株式会社囑託、会社工事監督 1909.2台湾総督府囑託、10月に台湾総督府土木部營繕課囑託 1911.10台湾総督府土木局囑託 1912.3台湾総督府民政部土木局技手 1915.4脳神経衰弱症で依願免本官
倉持壽吉	茨城	工手学校 (1899.9)	1899.12 (4)	1899.12臨時台湾土地調査局図根測量生徒 1900.6臨時台湾土地調査局技手 1904.3勲励賜金393円
相川末男 (士族)	静岡	土木科修業 (1899.2)	1899.12 (1)	1899.12臨時台湾土地調査局図根測量生徒 1900.6臨時台湾土地調査局技手 1900.12殉職
小林 角次郎 (士族)	広島	土木科修業 (1894.12)	1899.12 (5)	1894.12陸軍省臨時測図部附（雇員月俸10円） 1895.1陸軍省臨時測図部測図手 1897.4陸軍省陸地測量部雇 1899.12臨時台湾土地調査局図根測量生徒 1900.6臨時台湾土地調査局技手 1902.4三角測量監督兼事務監督 1905.3成績上等賜金462円
宮坂 正八郎	長野	機械、8期 (1893.2)	1899.12 (3)	1893.4河西組松本支店 1895.5河西組横浜支店 1897.11河西組新橋支店 1898.6田島商店 1899.12臨時台湾土地調査局図根測量生徒（雇員） 1900.6臨時台湾土地調査局技手 1903.2停職
江崎 傳三郎	福岡	土木、21期 (1899.7)	1899.12	1899.12臨時台湾土地調査局図根測量生徒 1900.6臨時台湾土地調査局技手 1903.12依願免本官
藤村太吉	東京	土木、20期 (1899.2)	1899.12 (4)	1890.5陸軍歩兵二等軍曹 1895.6警視庁警察署 1898.10東京郵便電信局書記 1898.11東京内務管理局雇 1899.2東京府土木科雇 1899.3高工秋炭坑株式会社測量員 1899.9内務省第一区土木監督署臨時雇 1899.12臨時台湾土地調査局図根測量生徒 1900.6臨時台湾土地調査局技手 1902.4三角測量監督兼事務監督 1904.3勲励賜金437円
石田宗一	東京	工手学校 (1896.2-7)	1899.12 (0.2)	1898.4-1899.3順天求合社中学校 1899.4数理専修学校 1899.12臨時台湾土地調査局図根測量生徒 1900.2病いのため解雇

小栗 駒太郎	静岡	工手学校 (1899.1-12)	1899.12	1899.12 臨時台湾土地調査局図根測量生徒 1900.6 臨時台湾土地調査局技手
釜谷常次	石川	機械、20期	1901 以前	1901 金瓜石鉱山日本鉄工会社
国乗耕馬	高知	採冶、11期 (1894.7)	1900.2 (3)	1894.10 三菱合資会社吉岡鉱山（月俸12円） 1897.4 台湾総督府基隆築港調査委員附（雇員月俸30円） 1898.5-1899.6 工手学校に再入学、土木学を修習 1899.4 臨時海軍建築部勤務海軍技生
				1900.2 臨時台湾土地調査局技手 1903.12 免官
吉田 武四郎		工手学校	1900.3 以前	不詳
笠原藤藏	新潟	土木、20期 (1899.2)	1900.3 (2)	1897.5 東京市水道部 1899.3 東京府第二課雇（月俸12円）5月出張監督南葛飾郡治水工程 1900.1 南多摩郡治水工事を監督のため出張
				1900.3 台湾総督府土木課雇（月俸30円） 1900.8-1901.10 基隆水道水原工事掛員を担当のため、出張 1901.10 依願免雇、台北県辨務署技手に就任
吉井九郎 (士族)	大分	土木、11期 (1894.7)	1900.3 (3)	1887.12 兵衛工兵中隊 1894.8 工兵第六大隊補充中隊、9月任陸軍工兵二等軍曹、12月編入工兵第六大隊第一中隊 1895.12 工兵第六大隊補充中隊に編入、陸軍工兵一等軍曹に就任 1896.4 大分県土木工手（月俸15円）、5月に大分県道路改築、測量及び工事監督に従事 1897.11 海軍技手
				1900.3 臨時台湾土地調査局技手 1903.3 依願免本官
小山廉一 (士族)	大阪	造家、17期 (1897.8)	1900.5	1890.9 大阪陸軍経営部雇 1896.4 陸軍省臨時陸軍建築部図工 1899.3 陸軍省臨時陸軍建築部技手
				1900.5 台湾総督府民政部土木課技手
鈴木楠雄 (士族)	和歌山	土木、10期 (1894.2)	1900.6 (16)	1894.6 埼玉県工事雇（日給45銭）、12月茨城県河川測量助手（月俸12円） 1896.4 内務省第一区土木監督署調査部雇（月給12円） 1897.12 第一区土木監督署土木監督署直轄工事部兼調査部技手
				1900.6 台湾総督府土木部技手 1908.8 蘇澳、大濁水溪間道路豫定線調査 1912.4 民政部蕃務本署技手兼任、蕃地道路測量に従事 1913.8 桃園庁技手兼任 1915.4 宜蘭庁警部兼任 1916.5 台湾総督府技師に昇格、6月に阿米巴赤痢で依願免本官

三浦平三 (士族)	京都	電工科 (1895.9)	1900.7 (5)	1894.8 逓信省電信燈台用品製造所雇工 1895.11 京都電燈株式会社技手補 1896.12 京都電燈株式会社技手 1898.8 神戸神電話交換局電話工手
				1900.7 台北電話交換局備、10月に電話工手 1901.6 台北電話交換局雇員 1902.3 台北郵便電信局建築課試験掛兼電信課電話掛技手 1903.5 台東、鵝鑾鼻間の無線電信を設置のため出張、9月に 台南郵便電信局建築課試験掛兼電信課電話掛技手に就任 1905.9 マラリアで依願免本官
木梨二郎 (士族)	山口	土木、23期 (1900.7)	1900.6 (2)	1897.11 大阪地方裁判所雇 1898.3 台湾辨務署 1900.3 遠山鉄道の創設に参与
				1900.6 臨時台湾土地調査局雇 1901.3 臨時台湾土地調査局技手 1902.1 肺病で依願免本官
高崎才藏 (士族)	鹿兒島	造家、22期 (1900.2)	1900.7 (14)	1899.7 東京新橋鉄道作業局雇（月俸12円） 1900.3 工務部国府津保線事務所雇
				1900.7 台湾総督府民政部土木課雇（月俸25円） 1914.6 マラリアで依願免官
塚田 欣一郎	長野	造家、23期 (1900.7)	1900.8 (9)	1900.8 台湾総督府鉄道部雇（月俸30円） 1903.6 台湾陸軍經理部雇（月俸40円） 1906.3 台湾総督府民政部土木課雇（月俸40円） 1906.12 嘉義庁技手 1908.7 台湾総督府鉄道部技手 1909.2 臨時台湾工事部技手兼民政部土木局技手
森鉦太郎 (士族)	愛知	建築、23期 (1900.7)	1900.8	1900.8 台湾総督府鉄道部工務課雇（月俸30円） 1901.8 台湾総督府鉄道部工務課技手 1905.10 依願免本官、11月に逓信省鉄道作業局 雇（判任待遇、月俸38円） 1907.3 帝国鉄道庁工務部水戸營業事務所雇（月俸35円） 1908.1 帝国鉄道庁工務部水戸營業事務所技手、同月21日依 願免本官、2月臨時陸軍建築部技手に就任 1909.5 東京砲兵工廠技手 1912.8 台湾総督府民政部土木局技手 1914.6 マラリアで依願免官
矢田 貝静睦	鳥取	造家、23期 (1900.7)	1900.12 (14)	1900.12 台湾総督府雇 1904.3 台湾総督府民政部土木課技手（月俸5円） 1909 台南庁技手 1914.10 腸粘膜炎兼神経衰弱症で依願免本官
原田 斧太郎	秋田	冶金、1期 (1886.7)	1901 以前	1901 藤田組瑞芳鋳山技師 木村組牡丹坑鋳業所長 金瓜石田中鋳山技師 1917 基隆船渠株式会社支配人に転職
安田 靖太郎	新潟	機械、19期 (1898.7)	1901 以前	1901 汽車製造合資会社台北支店

岡積幸	鹿兒島	土木、24期 (1901.2)	1901.3 (22)	1901.3臨時台湾土地調査局技手 1907.5台北庁技手兼台湾総督府技手 1908.5鳳山庁技手 1911.11宜蘭庁技手 1916.5台湾総督府技手兼任 1919.6台湾総督府技手専任 1923.3阿米巴赤痢で依願免本官
大野 庄三郎	三重	土木、20期 (1899.2)	1901.3 (4)	1899.3東京市水道部工務課技手補 1899.6本間鉄道工業事務所技手 1901.3臨時台湾土地調査局技手 1905.3勲励賞与
伊藤 徳治郎	三重	土木、24期 (1901.2)	1901.3 (3)	1901.3臨時台湾土地調査局技手 1903.10免官
梅田清次	熊本	土木、24期 (1901.2) 東京物理学校 数学科 (1908.2)	1901.3 (21)	1901.3臨時台湾土地調査局技手 1903.10依願免本官 1904.2陸軍省陸地測量部雇員 1911.7台湾総督府技手 1912.7台湾総督府民政部土木局技手 1916.1臨時台湾総督府工事部技手兼任、10月台北庁技師に就任 1920.9台北州内務部土木課長 1922.2神経弱症で依願免官
上野 左司摩	福島	土木、24期 (1901.2)	1901.3 (12)	1901.3臨時台湾土地調査局技手 1908.10台湾総督府民政部殖産局事務嘱託 1909.10日英博覧会準備補助委員 1913.4神経衰弱症で依願免官
白濱 傳之進	鹿兒島	土木、24期 (1901.2)	1901.3	1901.3臨時台湾土地調査局技手
塩原才助	埼玉	土木、24期 (1901.2)	1901.3	1901.3臨時台湾土地調査局技手
青山 廉次郎	秋田	土木、24期 (1901.2)	1901.3 (2)	1899.4内務省第一区土木監督署調査部雇 1900.10神奈川県庁内務部第二課土木係雇 1901.3臨時台湾土地調査局技手 1902.12依願免官
佐佐木 為治	宮城	土木、24期 (1901.2)	1901.3	1901.3臨時台湾土地調査局技手 1904.5勲励賞与188円
高崎慶二	鹿兒島	土木、24期 (1901.2)	1901.3	1901.3臨時台湾土地調査局技手
弓削 鋌一郎	新潟	土木、23期 (1900.7)	1901.3 (3)	1900.7内務省土木局雇 1901.3臨時台湾土地調査局技手 1903.10退官 1904新潟県技手

嶺謙也		土木	1901.3 (28)	1901.3電話工手、11月に電話交通局技手 台北郵便電信局通信技手 1906.10台湾総督府民政部通信局技手 1907.1台南郵便電信局技手、7月に嘉義郵便局技手兼任 1916.11台湾総督府民政部通信局兼台南郵便局技手 1925台湾総督府交通局遞信部技師 1929.7四級俸下賜、慢性胃病と神経衰弱で依願免本官
山崎甚八	茨城	土木、20期 (1899.2)	1901.4 以 前	1901.4台湾総督府鉄道部打狗出張所技手
手島英輔	鹿兒島	建築、21期 (1899.7)	1901.4 以 前	台南橋仔頭製糖会社
中條武通 (士族)	鹿兒島	土木、24期 (1901.2)	1901.4 (3)	1901.4宜蘭庁技手 1901.12台中庁技手 1904.1神経衰弱症で依願免本官
磯田 清之助	京都	土木、7期 (1892.7)	1901.7 (8)	1894.4山梨県技手 1900.10奈良県技手 1901.7台湾総督府民政部土木課技手 1902.5臨時台湾基隆築港局技手兼台湾総督府技手 1903.3台湾総督府技手兼臨時台湾工事部技手 1909.10阿緬庁技師
岡本 淺次郎	愛知	土木、25期 (1901.7)	1901.8 (3)	1901.8臨時台湾土地調査局技手 1904.3勲励賞与185円
加藤近雄 (士族)	茨城	土木、19期 (1898.7)	1901.8 (2)	1898.8茨城県測量工手（月俸10円） 1899.6吉田組雇（月俸14円） 1901.8臨時台湾土地調査局技手 1903.7急性結膜炎で依願免本官
布施謹吾	茨城	土木、18期 (1898.2)	1901.8	1898.2茨城県測量工手（月俸11円） 1899.7東京府河川測量工手（月俸15円） 1899.4-1901.6大倉土木組（月給20円） 1901.8臨時台湾土地調査局技手 1906.11農商務省札幌釧山監督署技手 1911.5遞信省臨時發電水力調査局東京支局技手 1914.5台南庁技手 1915.10台北庁技手兼台湾総督府民政部財務局技手 1918.3台湾総督府技手専任 1919.6脚気病で依願免官
中山 祐四郎	茨城	土木、25期 (1901.7)	1901.8	1901.8臨時台湾土地調査局技手
小柳貞一 (士族)	長崎	土木、25期 (1901.7)	1901.8 (3)	1897.2三菱合資会社鯉田炭坑測量係員 1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、未卒業、未來台） 1901.8臨時台湾土地調査局技手 1904.7勲励賞与209円

千村萬吉	長野	土木、25期 (1901.7)	1901.8	1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、未卒業、未來台） 1901.8臨時台湾土地調査局技手 1905.3勲励賞与194円 1905.4陸軍省陸地測量部雇（月俸20円）、5月任臨時測図部 附（雇員月俸30円） 1911.4台南庁技手 1914.3朝鮮総督府臨時土地調査局技手（月俸35円）
福頼正人 （土族）	千葉	土木、25期 (1901.7)	1901.8 (2)	1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、採用内定）
				1901.8臨時台湾土地調査局技手 1903.5マラリアで依願免官
日高仙吉	福岡	土木、25期 (1901.7)	1901.8	1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、採用内定）
				1901.8臨時台湾土地調査局技手
山田市郎	埼玉	土木、25期 (1901.7)	1901.8 (2)	1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、採用内定）
				1901.8臨時台湾土地調査局技手 1902.9臨時台湾土地調査局図根測量員 1903.9マラリアで依願免本官
土岐 佐久次 （土族）	東京	土木、25期 (1901.7)	1901.8	1898.11本間鉄道工業事務所（日給25銭） 1899.8岩越鉄道線若松、北多方間及北多方、尾登間線路実測 1900.5東京電気鉄道会社線信濃町、川崎間及池上、大森間実 測 1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、採用内定）
				1901.8臨時台湾土地調査局技手 1904.11任官満三年以上、給与金53円 1907.3陸軍省臨時測図部陸地測量手 1913.8朝鮮総督府土地調査局技手 1919.4台東庁技手 1924.12依願免官
内田 和三郎	静岡	土木、25期 (1901.7)	1901.8 (3)	1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、採用内定）
				1901.8臨時台湾土地調査局技手 1903.10赤痢で直腸狭窄併発で依願免本官
樋口重治	埼玉	土木、25期 (1901.7)	1901.8	1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、採用内定）
				1901.8臨時台湾土地調査局技手 1902.9臨時台湾土地調査局図根測量員
村松 利太郎	新潟	土木、25期 (1901.7)	1901.8 (1)	1901.6臨時台湾土地調査局雇（月俸10円、採用内定）
				1901.8臨時台湾土地調査局技手 1902.10マラリアで依願免官
杉本又六	群馬	土木、20期 (1899.2)	1901.10 以前	1901.10台北県新起横街久米工業事務所
柴田久平	東京	土木、17期 (1897.8)	1901.10 (2)	陸軍築城部広島県忠海支部
				1901.10台湾陸軍築城部澎湖島支部 1903北海道土木部国費工事課
神代嘉一	山口	土木、11期 (1894.7)	1902 以 前	鳳山土木区出張所 1902.10大阪府堺市役所技術手

畑谷 純一郎	秋田	採冶、1期 (1889.7)	1902	藤田組瑞芳鉱山
太田 半五郎	東京	土木、24期 (1901.2)	1902.1	1901.2久米工業事務所（月俸15円）
				1902.3台湾総督府鉄道部打狗出張所雇（月俸23円） 1906.6藤田組嘉義出張所雇（月俸35円、）従事阿里山経営 1908.3台北庁總務課土木係土木事務囑託 1908.6台北庁總務課土木係技手 1910.5台湾総督府阿里山作業所嘉義出張所技手 1913.8台湾総督府阿里山作業所嘉義出張所保線手 1914.12台中庁囑託、八仙山道路工事監督 1915.7台湾総督府營林局技手 1918.5嘉義市で土木建築請負業を開設 1920.9台湾総督府殖産局營林所嘉義出張所技手 1928.6台湾総督府交通局道路港湾課技師 1928.7營林所鉄道相關事務囑託（月津貼150円） 1931.4依願免官
重永壯吉 (土族)	鹿兒島	土木、26期 (1902.2)	1902.4 (21)	1902.4臨時台湾土地調査局技手 1911.11南投庁技手 1920.9台中州南投稅務出張所地図保管主任 1921.10台湾総督府内務局技手兼任 1923.3マラリアで依願免本官
梶山 彌四郎	長崎	土木、11期 (1894.7)	1902.4 (2)	1895.6東京臨時陸軍建築部雇（日給40銭） 1896.9鉄道局工務課雇（日給35銭） 1900.4岡山県内務部土木掛雇（月俸5円）、壹備郡山田村県 道実測 1902.4臨時台湾土地調査局技手 1903.10退官賜金17.5円
大曾根 誠二	千葉	土木、15期 (1896.7)	1902.6 (1)	1896.8-1900.4鹿島組技術部 1898.11福島県安積郡普通水利組合囑託、工事測量、設計、 監督に従事 1900.12新見商店工業部工事係（測量、工事監督） 1901.4岩手県和賀郡役所囑託、水利組合指定水路を測量 1902.6臨時台湾土地調査局技手 1903.10退官賜金15円
緒方 龍太郎	福岡	土木、16期 (1897.2)	1902.6 (1)	1897.3南築土木会社社員 1900.7北海道庁上川支庁第二課土木係事業手 1902.6臨時台湾土地調査局技手 1903.10退官賜金15円
中村魁次 (土族)	香川	土木、17期 (1897.8)	1902.6 (1)	1897.11香川県内務部第二課雇員 1899.4神戸市臨時測量助手、12月に神戸市臨時測量技手に就 任 1901.6神戸市下水道調査臨時雇員、12月に調査技手に就任 1902.2神戸税關庶務課臨時雇員 1902.6臨時台湾土地調査局技手 1903.6マラリアで依願免官

吉田 文次郎	岩手	土木、17期 (1897.8)	1902.6 (1)	1898.8岩手県内務部土木掛雇員 1900.6郡道実測、9月に秋田県藤田組鹿用郡平坂鉦山雇員 1901.5福県内務部土木掛吏員、測量従事
				1902.6臨時台湾土地調査局技手 1903.6マラリアで依願免本官
公莊 勝二郎 (士族)	愛媛	土木科 (1899.2)	1902 (28)	1899.12横浜市水道雇員（月俸14円） 1900.4第四號隧道堀鑿工程西口監督、9月に山梨県工手（月俸14円）に就任、富士川通禹瀬及び金無川笛吹川河川の改修、測量、台帳作り
				1902.6臨時台湾土地調査局技手 1905.3新竹庁技手、5月に新竹街市区改正事務委員に就任、7月に臨時台湾戸口調査調査委員に就任 1906.12土地図保管主任 1907.4新竹庁土地整理組合事務囑託 1908.5台湾総督府民政部土木局技手、7月任臨時台湾工事部水利課技手 1909.12新竹庁技手 1916.11宜蘭庁公共埤圳聯合会技手 1921.1台北州宜蘭郡技手、11月に台南州土木課土木係長に就任 1927.9台湾総督府台南市土木技師、10月に台南州内務部土木課土木係長、庶務課長を兼任 1930台湾総督府技師、7月に近視、乱視で依願免本官 1934彰化頭汴埤及溪頭圳水利組合長、彰化市議会議員
内藤祐藏	岡山	土木、18期 (1898.2)	1902.6 (1)	1898.4兵庫県工手 1899.3加石川河身の改修、測量のため出張
				1902.6臨時台湾土地調査局技手 1903.10退官賜金15円
永野 三九郎 (士族)	宮城	土木、22期 (1900.2)	1902.6	1895.4日本赤十字社戦時救護員 1896.4-1897.5仙台市附屬員 1900.3岩手県土木助手、従事北上川河川測量 1901.4土木工手
				1902臨時台湾土地調査局
鬼武徳次	山口	土木、26期 (1902.2)	1902.6 (1)	1896.4尋常高等小学校卒業 1897-10-1898.8従山陽鉄道工程
				1902.6臨時台湾土地調査局技手 1903兵庫県に就職
前澤 元之助	群馬	土木、26期 (1902.2)	1902.6	1892.3自高等学校卒業 1895.3群馬県蠶種検査傳習所に入所 1898.5群馬県利根川河川測量に従事
				台湾総督府民政部土木課 1902.6臨時台湾土地調査局技手 1903嘉義庁打猫土地調査派出所

田淵 徳太郎	岡山	土木、26期 (1902.2)	1902.6 (13)	1893.3 高等小学全科卒業 1897.7 内務省第六区土木監督署河川測量
				1902.6 臨時台湾土地調査局技手 1904.6 蕃薯瘰癧技手 1905.7 臨時台湾戸口調査委員 1909.10 阿緱庁財務課技手 1911.10 民政部殖産局林野調査課技手 1915.6 神経衰弱症で依願免官
大河内 留八郎 (土族)	宮城	土木、26期 (1902.2)	1902.6 (1)	1902.6 臨時台湾土地調査局技手 1903.10 マラリア、三叉神経痛で依願免本官
金子泰輔 (土族)	山口	土木、26期 (1902.2)	1902.6 (13)	1902.6 臨時台湾土地調査局技手 1903.10 基隆庁内務課技手、11月に臨時台湾土地調査局技手 兼任 1907.8 基隆市区改正実地調査事務員、台湾永久借地調査員 1909.2 基隆庁地図保管主任、10月に財務課技手に就任 1909.10 台北庁財務課技手 1911.10 台湾総督府民政部殖産局林野調査課技手 1915.3 神経衰弱症で依願免官
角田 莊次郎	岡山	土木、26期 (1902.2)	1902.6 (0.4)	1894.3 小学全科卒業 1895.2 煙草製造業、醬油醸造業に従事
				1902.6 臨時台湾土地調査局技手 1902.11 マラリアで殉職
荒井善作	長野県	建築、24期 (1901.2)	1902.7 (29)	1900.3-1902.3 東京臨時陸軍建築部図工
				1902.7-1907.6 台湾陸軍經理部技手 1907.8-1922.3 台湾総督府營繕課技手 1922.3 技師に昇格、台北州内務部土木課營繕係長に就任 1931.4 神経衰弱症で依願免官、荒井建築工務所を創設
坂西修広		土木、19期	1902.11 以前	久米工業事務所
黒岩久衛	高知	機械、24期	1902.11 以前	台湾総督府鉄道部
久木 耕之助	和歌山	土木、19期 (1898.7)	1902.11 以前	1902.11 兵庫県福良町築城部支部
				不詳
後藤 麟三郎 (土族)	東京	造家、14期 (1896.2)	1902.11 (12)	1891.2 逓信省郵便為替貯金局備 1893.5 逓信省郵便為替貯金所書記補 1896.5 臨時陸軍建築部東京支部技手 1902.5-6 對馬、上川に出張
				1902.11 台湾総督府土木局營繕課技手 1909.10 台湾総督府土木部技手 1915.2 マラリアで依願免官
高見謙次	群馬	造家、19期 (1898.7)	1903 以 前 (10)	1904.12 台湾陸軍經理部雇員 1909.10 台北庁技手従事營繕事務 1914.5 脚気で依願免官
山内一家	熊本	機械、25期 (1901.7)	1903 以 前	不詳

永井利高		工手学校	1903 以前	不詳
長谷川 図藏	長崎	土木、29期 (1903.7)	1903 (16)	1903台北大稻埕建成街英成商会 1905宜蘭庁土木課雇員 1907.1宜蘭庁第一公共埤圳組合囑託技術員 1908.3宜蘭庁公共埤圳聯合会技手 1909.4台北水道事務所技術員 1910.9台湾総督府土木部技手 1913.6花蓮港庁技手 1921.5マラリア、神経衰弱で依願免本官
岩淵恕	岩手	土木、11期 (1894.7)	1903 (21)	1900北海道庁技手 1903台湾総督府基隆築港局技手 1903.2宜蘭庁技手、土木係主任 1907.5土木係長 1910.6阿里山作業所技手 1919.9台湾総督府土木局土木課技師に昇格、10月に台湾電力株式会社監理官に就任 1920民政部土木局土木課技師 1921.1台中州土木課長 1924.12辞官、台湾工程社を創設、土木承包業測量に従事、自動車学校校長担当、岩淵金網工業経営、図紙機械販賣、工程材料供給
山本久造	山口	土木、17期 (1897.8)	1903	1903台湾築城部基隆支部、基隆要塞司令部基隆支部
尾辻国吉	鹿児島	建築、29期 (1903.7)	1903.8 (31)	1903.8台湾総督府民政部土木局營繕課雇 1907.3台湾総督府民政部土木局技手 1909-1910.7日英博覧会大倉組出品物陳列所建築監督、渡英 1910.8台湾総督府土木部營繕課技手 1916.3宜蘭庁員山貯木場庁舎及官舎設計、謝金40円 1916.3-11香港、新加坡、馬來半島、爪哇、婆羅洲、西里伯斯、菲律賓に出張、熱帯建築視察 1917.6台南庁庶務課技手 1920.8国勢調査調査委員 1920.9台南州内務部土木課營繕係長 1920.12台南州内務部土木課技師 1922.7総督府専賣局技師 1934.6坐骨神経痛で依願退官、煙草元賣捌に従事
今井薫	島根	土木、16期 (1897.2)	1904	台湾総督府民政部土木課
与田久吉 (舊姓加藤)	福岡	土木、20期 (1899.2)	1904	志岐組台南支店
森川市郎	佐賀	建築、20期 (1899.2)	1905	海軍澎湖島馬公要港部建築科出張所
山野繁樹 (士族)	東京	採冶	1905 (8)	1877.5内務省警部補 1893.4警視庁警察署雇員 1895.3遞信省郵便電信書記補 1897.7台湾総督府民政部土木課雇員 1905.8病いのため、依願免官

平松 克太郎	和歌山	土木、17期	1905	1905 鹿島組台南出張所
森田英男		工手学校	1905	1905 藤田組瑞芳鉱山
山口楠夫	和歌山	採鉱、9期 (1893.7)	1905	1905 藤田組瑞芳鉱山
富岡 雄渡治	群馬	採冶、26期 (1901.7)	1905	1905 藤田組瑞芳鉱山
藤原 堅三郎	岡山	建築、24期 (1901.2)	1905 (2)	1906 台湾総督府土木局技手 1908.3 神経衰弱症、肺病で依願免本官